
オーバーエイジ・プレイブヒーロー

嶋本圭太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーバーエイジ・ブレイブヒーロー

【NZコード】

N7088X

【作者名】

嶋本圭太郎

【あらすじ】

早乙女智浩が気づいたとき、あたりは見たことのない景色につつまれ、そして見たことのない生き物がいた。

見知らぬ異世界、謎の少女、そして与えられた強大な力
どこにでもある、陳腐な物語？

だが、智浩はそんなものは知りはしない。何故なら……。

早乙女智浩は、いま、必死に走っている。

決して運動会の最中でもなければ、陸上の選手というわけでもない。むしろ、智浩は運動とは縁遠い生活を長く続けていた。

智浩は、追われていた。

理由などわからない。相手は智浩を視界に入れるなり、その牙を剥き出しにしてこちらを追いかけ始めたのだ。

「いつたい、なんだつて、いうんだ！」

理不尽さのあまり叫び、背後を確認する。

当然、そいつはまだ智浩の背後にいて、巨大なふたつの瞳をらんらんと輝かせてこちらへ迫ってきていた。

人間ではない。

大きく裂けた口と、そこに整然とならぶ鋭い牙。見るからに強靭な後ろ肢と、それに比べればだいぶ華奢な前肢。そして全身をおおう緑色のうろこ。

智浩の知識からすれば、それは恐竜と呼ばれるものに相違なかつた。

全長三メートルほどで、恐竜なのだとすればその中ではちいさな部類だが、一七三センチメートルと日本人の平均身長ほどの背丈しかない智浩とくらべれば、倍近くはあるということである。

それが、ときほどから智浩に迫ってきているのだ。

「ひいっ！」

悲鳴を上げて、また正面をむく。彼の両足はだいぶ前からしきりに限界を訴えていたが、足を止めるわけにはいかない。

これは夢か？なんだつて私がこんな目に！

もはや叫ぶこともできない。すっかり顎があがってしまい、いくら息を吸っても酸素を取りこめた気がしない。

そもそも、ここはどうだ？

智浩が走っているのは車一台がやっと通れるそうな狭い道で、しかもまったく舗装されておらず、両側は森が広がっている。どこかの山奥だらうか？ しかし、彼は直前まで自分の住むマンションにいたはずだった。

もう何年も旅行すらしていなかつた彼には、こんな風景は記憶にすらないものだつたのだ。

「うわっ！」

ついに足がもつれ、智浩はその場に突っ伏した。立ち上がりつつも、一度動くのを止めてしまつた足はもう動かさうとを聞いてくれない。

振り向けば、恐竜がもつすぐそこまで迫つてきていた。智浩がもう逃げられないと悟つて走るのをやめ、一歩一歩ゆっくりとこちらへ迫つてきていた。

呪文を、唱えて。

「？」

唐突に頭の中に声が響き、智浩はあたりを見回した。だが、田の前に迫る恐竜のほかには誰の姿も見えない。

私の言葉に続いて？ em - avia - dia ...。

透明感のある若い女性の声。はつきりとした指示の言葉に続いて、よくわからない、それこそ「呪文」といづべきことばが続けられる。

見ず知らずの世界、突如おそいくる怪物、そして頭にひびく女性の声。

もしも智浩が夢と想像に満ちた子供であつたなら、理解できない

までも女性の声に従つていたかもしれない。

だが残念なことに、早乙女智浩は今年四十六歳になる中年だった。

「くつ、これはなんだ、幻覚、幻聴か？」

智浩は頭を振つて、自らの意識をはつきりさせよつとする。

望安濃商事で勤続一十四年、経理事務のエキスパートとして紙の台帳からパソコンへの切り替わりにも対応してきた経験豊富な社会人。

しかしそうして積み上げられた経験は、えてして想定外の事態に対する柔軟性というものを、知らず知らず削り取つてしまつものなのだ。

彼の常識では、気がついたら見知らぬ森の中にいるなどといふことも、映画か博物館の中にしかいないような恐竜におそわれることも、頭の中に直接声が響いてくるなどいふことも、まったくもつてあり得ないことなのだった。

落ち着いて、私の言葉を聞いて？

当然、首を振つたくらいで田の前の怪物が消え去るはずもなく、女性も頭の中で智浩を呼びかけづけている。

「私は、どうしたんだ？ 死ぬ間際になつて、おかしくなつてしまつたのか？」

ちよつと、いいから呪文を！ 聞いてる？

そういひしている間にも恐竜は近づいてきており、頭に響く女性の声からもこころなしか焦りが感じられる。

「呪文つてなんだ！ 私は、そ、そんなもの知らないぞ！」

だから、今言ひてるじゃない！ em , avia , qian ,
anno! ほりー

女性の声も当初の落ち着いたものからはほど遠くなり、智浩を怒鳴りつけるようなものになつてゐる。

だが、智浩はそれすらわからぬほど、完全に我を失つていた。
「くそつ、これは夢だ、夢に決まつてる！」

ねえ、ほんとに言わないと、まあいんだつて、ねえつてば！

「田を開じる、そうすれば、すぐにこんな夢」

眼前に迫る恐竜の迫力に、歯を震わせながら智浩は田を開じる。

ちょっと、ダメ！ そんなことしないで、呪文を唱えて！

頭に響く声も大慌てだ。

「そして田を開ければ、元のマンションに」

智浩が田を開く。

だがやはり、そこは先ほどまで自分がいたはずの見慣れたマンションの一室などではなく、森に囲まれた道の途上。

そして、眼前にはぱっくりと開かれた恐竜の顎あきが、今までに智浩の頭部にかぶつつけられていた。

「うわーっ！」

あやーっ！

智浩だけでなく、頭の中の声まで叫んだ。
そして、智浩の視界が真っ赤に染まつた。

「な、なんだ……」

智浩は呆然と、目の前の光景を眺めている。

視界が赤く染まつたのは、彼の頭蓋が碎かれたからではなかつた。今まさにそうせんと、口腔をいっぱいに広げて見せていた目の前の恐竜は、しかしその口を閉じることがなかつた。

恐竜は、燃えていた。

比喩ではなく、文字通りその全身から炎を吹き出していたのである。それが智浩の視界を染めていたのだつた。

どうしてそうなつたのかなど智浩には知る由もないが、とにかく恐竜が自分の意志でそうしたのでないことは明白だつた。

智浩が尻を引きずりながら恐竜の口から離れるのとほぼ同時に、それはゆらめくようにして崩れ落ち、そのまま息絶えたのである。恐竜は倒れた後も燃え続ける。頑丈そうに見えた緑色のうろこもあえなく焼け焦げ、全身がほぼ炭となつた頃、ようやく鎮火した。

「た、助かった……」

智浩は恐竜が完全に動かなくなつたのを確認すると、大きく息をついた。

そして、尻についた土を払い落としながら腰を上げる。

人生で初めてではないかと思うほど距離を全力疾走したため、膝がわらつてなかなかということを聞かなかつたが、それでもなんとか立ち上ることに成功した。

それから、改めて辺りを見回す。

気持ちが落ち着いても、そこはやはり智浩の記憶にはない場所だつた。どうやってここに来たのかも思い出せない。

今日の行動をいちから思い出してみる。今日は会社が休みだつたので、起きたのは午前九時過ぎだつた。それから軽い朝食をとつて、そして……。

その思索を中断したのは、草を搔きわけるがさがさという音だつた。

もしかして、恐竜の仲間がいたのか？

智浩の背筋が寒くなる。再び逃げ出そうにも、足は限界だ。長い距離を逃げるのは不可能だった。

音は森の中から聞こえてくる。むつきのとは別の生き物だらうか？
智浩は動くに動けず、音のする方を注視した。

やがて、現れたのは。

「あれっ、大人の人だ？」

人間だった。

若い、というよりも智浩の感覚からすると幼いといったほうがしつくり来る女性だ。

息子と同じくらいだな。

智浩には妻との間にひとり息子がいる。今年十四歳になる息子の浩一の姿が頭に浮かんだ。

少女はとくに警戒する様子もなく、智浩のことを眺めまわしている。無遠慮な視線に面食らいつつも、とりあえず襲ってくる様子はないので智浩はすこし身体の力を抜いた。

「でも格好からしても、確かにあっちの人だよね」

少女のほうは智浩の観察を終えると、かたわらでまだ煙を上げている恐竜の死骸を見やつた。

「うわ、一口が黒こげに……まさか、呪文もなしで……」

なにやらぶつぶつ言っている少女を、今度は智浩が観察する。

少女は長い金髪を後ろでまとめており、瞳の色も黒ではなく、薄い茶色だ。染めているのでなければ、外国人だろう。だが、独り言も流ちょうな日本語をしゃべっている。両親は外国生まれだが、彼女は日本で生まれ育った。そんなところだらうか。

少女の格好は少々奇抜といえた。前合わせの白い服はところどころ赤いステッチが入つていて、上半身だけ見ると神社にいる巫女の格好のようにも見える。

だが、履いているのは袴ではなく、膝上の結構きわどいミニスカートだった。足下は素足にサンダル履きだ。

最近の中学生は、こんな格好をするのか？

ふだん街で見かける子供たちの服装はここまで突飛でもなかつたと思い、智浩ははたして声をかけていいものか、とすこし戸惑つた。だが、今の智浩はまさに、右も左もわからない状況である。ここがどこであれ、自宅に帰らなければならぬ。どっちに向かえば街へ出られるかくらいは教えてもらえるだろう。

「君、すまないが……」

「あなた！ どうして人の忠告を無視したの？」

智浩の声は少女の怒声にかき消されてしまった。

「忠告？ なんの話だ」

「さつき襲われてたときの話。わたしのいうとおりにしていればあんな危ない目に遭う必要なかつたのに」

智浩はそう言われてはじめて、さきほど頭の中に響いていた声が彼女のものと一致していることに気がついた。

「あれは、君の声だつたのか？」

「そうよ」

頭の中に直接響いているように感じたが、実際には彼女が近くにいて叫んでいたということだろうか。

「あそこまで言うことを聞いてもらえないなんて思わなかつたわ！」

智浩は少女がなんと叫んでいたか思いだそうとした。細部は思い出せないが、呪文がどうとか言つていたように思える。

助かるように祈れ、という意味だつたのだろうか？

あの状況で祈つたところで助かるとも思えなかつたが、智浩は謝罪することにした。彼女が自分のために叫んでくれたことにはかわりない。

「それはすまなかつた。状況が状況だつたから、さすがに動転してしまつていてね。それで、これも君が？」

智浩はすっかり炭化した恐竜の死骸を見やつた。

ものの数分でこの有様である。よほど強力な火力だつたことは間違ひない。

だが、少女は手ぶらだ。この恐竜を燃やした火器はどこかに置いたのだろうか。

少女の答えは、智浩にとって意外なものだった。

「なにいってるの。それはあなたが自分でやったのよ

「 は？」

なかばあきれたような少女の返答に、智浩の目が点になる。

「私が？私はマッチ一本持っていないぞ」

智浩は嫌煙家である。

そのことに対する少女の答えは、智浩にとって全く理解不能だった。

「道具なんか必要じゃないわ。これは魔法。本当は呪文がなければ正しく制御なんかできないんだけど、極限の危機に瀕して例外的に発動したってところかしら」

「まほう？」

智浩は少女の言葉を反芻した。

彼は魔法、という言葉は知っている。その意味も。

だが、それは彼にとって映画や、彼の息子が遊んでいるテレビゲームの中のものだ。

「私は、子供じゃない」

しばらくまばたきを繰り返した後、智浩が口にしたのはそんな言葉だった。

「見ればわかるわ」少女は素つ気なく言ったあと、ため息をついた。

「私も、大人の人を召喚するのは初めてだけど」

「 しょうかん？」

智浩はまた抑揚なく繰り返した。少女の言葉についていけない。

「 そうよ」

少女はうなずいた。それから大きく腕を広げて、言った。

「ここは、あなたの住んでいたのとは異なる世界。あなたはわたしに、この世界へと召喚されたの」

「 召喚？」また繰り返した。「 何のために？」

少女は智浩の田を真正面からのぞき込んだ。その田は真剣なものだったので。

「魔者として、この世界を救つてもいいひため」

(一) (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

この作品については、あまり書き溜めをしてこないので更新は少しきになると思つか。

続きを読みたい方は、どうぞお待ちください。

ご感想、ご意見など、こつでもお待ちしております。

智浩は、ともかく近くの街に案内するといつ少女の言葉に従つて、彼女の後ろをついて森を進んでいた。

彼女の語る、魔法だの召喚だの、さらには勇者だの世界をすぐうだのという言葉の数々について、智浩はまったく実感をもてなかつた。少女についていくことに、不安がなかつたわけではない。

だが、いま彼が置かれている状況そのものが、彼にとつて理解不能なのだ。彼女と別れてひとりで森をさまよつて、果たして無事我が家に帰りつくことができるだろうか？ 智浩にはそつは思えなかつた。

より正直にいえば、ひとりになるのは怖かったのである。

もちろん、少女についていくにあたつて、そんな素振りはおくびにも出さない。君のいつていることは正直理解不能だが、とりあえず人のいるところまでは一緒に行つてもいい。とそんな態度だ。

智浩からすれば相手は自分の息子ほどの少女　歳をたずねたわけではないから、あくまで外見からの推測ではあるが　であり、自分は大人だ。まして男である。

大の大人の男性が、森の中でひとりになるのは怖いなどと、年端もないかない女性にいうわけにはいかない。本当は少女と一緒に歩いているいまも、ともすれば得体の知れない不安が背筋のあたりから上つてきそうになるのだが、智浩は腹の底にぐつと力を入れて、平然を装いつつ少女のあとをついていく。

少女の方はそんな智浩の態度をとくに気にした様子もなく先を進む。ときおり智浩がきちんとついてきているか確認するため振り返るが、ちらと確認するだけでとくになにをいうこともない。

ふたりが進んでいるのは、さきほど智浩が必死になつて逃げていた細いが踏み固められた道ではなく、森の中だった。少女の案内がなければ、智浩は入つてみようとも思わなかつただろう。

一応、じばらく入ったあたりからとひびく土が露出した獣道のようになつたが、幅は人ひとりがやつと通れる程度で、智浩からすれば歩きづらうことこの上ない。

そもそも、智浩はいま靴を履いていない。紺色のポロシャツにベージュのチノパン、それに白のソックスといつ、マンションの一室にいたときの格好のままだった。さきほど恐竜に追いかけられるときは必死すぎて気にする余裕もなかつたし、地面が乾いていたのでそれほど走りづらいといつともなかつた。しかし、こうして森の中のしめつて柔らかい土の上を歩くとなれば、洗濯されたばかりの白のソックスはあつとこうまに土の色に染められて汚れてしまつているし、足下の触感がダイレクトに伝わってきて、少々気持ちが悪い。

都会暮らしが長く、歩くといえどアスファルト舗装の道の上ばかりだつた智浩にはなかなかの苦行といえた。強すぎる草のにおいも智浩を辟易させる。

「おじ君。なぜこんな森の中を行くんだ？ セツキの道の方が多少なりとも歩きやすそうだったと思うのだが」「

ついに我慢しきれなくなり、智浩は田の前の少女に声をかけた。

少女は足を止め、振り向いた。

「こっちの方が近いし、それに、あの道を戻ると、またアーロが出来るわよ」

「アーロ？」

「セツキの怪物」

少女の言葉で、眼前に迫る無数の牙の列が思い出されて、智浩は身震いした。

「すこし前からあの人あたりを狩り場にしているの。おかげで街道は使えないわ

「そつか……」

智浩はちいさくため息をついた。それなら、我慢してこの道を行くほかはない。

「ミコールよ」

少女がそう言い、智浩は顔を上げた。

「え？」

「わたしの名前。あとでちゃんと自己紹介するけど、名前がわから
ないと呼びづらいわよね」

「あ、ああ」

「おじさんの名前は？」

「私は智浩。……卑乙女智浩だ」

智浩は少女につられるようにしてファーストネームを答えたが、
すぐに恥ずかしさを感じてフルネームで言い直した。

「トモヒロね。もうすこしで森は抜けるから、がんばって」

少女は軽く笑みを浮かべてそういうと、また獸道を進みはじめた。

もうすこし 確かにそういうっていたはずだ。

だが、智浩はその後も森の中をたつぱり三十分は歩かされた。

「ほら、森が切れるわ」

進行方向から差し込む太陽の光を手でさえぎるよつにしながら、
ミコールが智浩に声をかけた。

「や、やつとか……」

日頃の運動不足がたたつた智浩は息が上がっていたが、ミユール
の方は平然としている。

「だらしないなあ、おじさん」

そう言われても、反論のしようもなかつた。

森を抜けると、一気に視界が開ける。

なだらかな下り坂がずっと先まで続いているため、かなり遠くま
で見通せた。

「ほら、あそこが目的地。リボーテの街よ」

ミコールが指示する方向に、外壁に囲まれた石造りの街が一望で
きた。

外壁の周りには、農地が広がっているのも確認できる。

農地はある程度のところで途切れ、あとはすと草原が広がっていた。

「 ん？ ちょっと待て」

智浩は悪い予感がした。「 あそこまで、歩いていくのか？」

自分たちの方が高い位置にいるとはいえ、街の全貌が視界にはいるというのは、街がかなり遠いところにあるという証拠だ。

ミコールがそれを聞いてくすぐると笑った。それを見て、智浩は自分がよほど情けない顔をしていたことに気がつき、あわてて表情を引き締めた。

「 さすがに、あそこまで歩いたら口が暮れちゃうわ」

ミコールは笑うのを止めて、しかし笑顔のまま智浩にいった。

「 馬をつないであるから。 いつかよ」

「 馬？」

オウム返しになつた智浩の声には答えず、ミコールはまた智浩に背をむけて歩き出す。

歩かないというから車でも停めてあるのか、と思つたら、馬？

智浩は首をかしげたが、ひょっとしたら何か別の単語を聞き間違えたのかもしれない、と思い直してとりあえずあとをついていった。

「 ほら、あそこ」

しかし、いくらか森沿いを進んだあと、ミコールが指し示した先には、まさに言葉どおりに馬が木につながれて草を食んでいたのだった。

「 馬？」

「 ？ 馬よ」

智浩がまたそつこつたので、ミコールが振り返つて不思議そうにこたえた。

馬の背には鞍がのせられており、ほかには荷台のよつなものもな
い。

どうやら、本当にこの馬に乗つて街まで行くよつだつた。

「 私は、馬に乗つた経験はないのだが

「あはは、平氣よ。私の後ろで座つてゐるだけでいいんだから、
どうや、ミコールとふたり乗りをするといふことらしい。馬は
一頭しかいないので、当然といえばそうではある。

「ゲイロン、おまたせ」

ミコールは馬の方へ近づくと、その首を一度かるくたたいてやりながらさう声をかけた。それから馬をつないである木の方へ行き、繩をほどきはじめる。智浩はすこし離れた位置からその様子を眺めていた。

馬は軽く鼻を鳴らしたあと、ミコールを追つようこ首を巡らした。その視線が何となくミコールの短いスカートの陰にむけられているように見えて、智浩はやや面食らつた。

まさか、馬だしな。

たまたまそう見えただけだらう、と智浩がひとつで納得しようとしていると、馬が唐突に首を戻し、こちらを見た。

あきらかに田つきが違い、こちらをこちらでいるかのよつである。そして智浩と田が合ひつや、その口が動いた。

「なに見てんだ、こひり

聞こえてきたのは智浩よりむつ一段低い声だつた。

「……え？」

明らかにミコールの声ではないし、もちろん智浩の声でもない。「なんか文句あるのか？」

また馬の口が動き、そこから声が聞こえてくる。

間違いない、馬がしゃべつていた。

しかも、智浩に因縁をつけていた。

「なんとかいえよ、おつさん

そういうわれても、智浩はなにも答えられない。

またしても発生した自分の常識の外にある出来事に、理解が追いつかないのだ。

馬は間違いない馬だ。競馬場にこもるようなものに比べるとやや小さめで足が太く、口巴に近によつにも見えるが、すべなくともかぶ

りものや着ぐるみのたぐいではない。

それが、どういうわけか人間の言葉を発している。

「」が映画館で、スクリーン越しにこの光景を見ているのなら、智浩も戸惑うことなく受け入れたかもしれない。

だが、智浩が立っているのはいわば、スクリーンの中だ。しかも台本も役柄も知らず、カメラも監督も見あたらない。

「ちょっと、なにいきなりケンカ売ってるのよ」

そこへ、縄を解いたミコールが戻ってきて、馬に声をかけた。

「あ、ミコールう。いやー、あのおっさんなんかじろじろ見てるからわあ」

馬はとたんに声色を変化させ、媚びを売るような甘い声を出した。「ゲイロンは紹介するまでしゃべらないで、つていっておいたですよ。あっちの馬はしゃべらないから驚くの。コーディのときもそうだつたじゃない」

「」のおっさんゼビージャなかつたけどな。完璧にフリーズしてゐる「混乱してぽかんと口を開けている智浩をしつこい、そんな会話を交わしてくる。

「とにかく、ゲイロンは勝手に口をきこつけやだめ。わかつた？」

「はいはい」

ミコールはゲイロンをたしなめると、智浩にむきなおった。

「」あんね、驚いたでしょ？この子はゲイロン。ちょっとスケベだけ悪いヤツじやないのよ」

「……」

「どいつも、あなたたちの世界だと言語は人間特有の文化みたいだけど、」では決してないの。まあ、やのつくなれると想つから、気にしないで

「あなたたちの、世界……」

智浩は小さくつぶやいてくる。ミコールは気にせず、智浩の背後に回つてその背を押した。

「細かいことは街に着いたら説明するから。ほら、乗つて

「乗る……これにか？」

智浩はゲイロンを、得体の知れないなにかのようになにか見た。

ゲイロンの方は、ミコールのいつけを守つてとくになにもいわず、馬銜はみを力チャ力チャ鳴らして智浩を見ている。

言葉は発していないのだが、「乗るなら早くしら」といつているように見えて、智浩はなかなかあぶみに足をかけることができなかつた。

そもそも、智浩は乗馬の経験はない。

ようやく決心してその背に乗ろうとしても、最初はうまくいかず、ミコールに尻を押してもらつてやつと鞍にまたがることができた。

「もうちょっと後ろに座つてくれる？ わたしが前に行くから」

そう言われて智浩が鞍の後ろまでずれると、ミコールは軽々と鞍にまたがってきた。

鞍はひとり用だつたが、ミコールは身体が小さいのでふたりでも窮屈さは感じない。

「結構揺れるから、しつかりつかまつていって」

手綱を手にしたミコールが指示をする。

智浩ははじめ、鞍のふちを後ろ手につかんでいたのだが、その様子を見たミコールに「それじゃあ、危ないわ」と言われ、両手をミコールの腰に回すよう誘導されてしまった。

智浩からすると少々恥ずかしかったのだが、こちど回した手を離すのはもつと恥ずかしいような気がしてそのままミコールの腰の前で両手をあわせた。

「じゃあゲイロン、お願ひ

ミコールが声で合図をすると、ゲイロンが鼻を鳴らしてから歩き出す。

智浩は理解の追いつかない出来事はひとまず考えないことにして、自分の子供ほどの歳の少女に馬に乗せてもらい、しかもその身体につかまって運んでもらつてこうのはずいぶん情けない図柄だなどと思つていた。

が、そんなことを考えていられたのはゲイロンが駆け足をはじめまでの短い時間だけなのであった。

(3)

「ほら、門が見えてきたわ」

「ああ……」

レンガ積の外壁は近づいてみるとなかなかに壮大な造りであったが、ミユールに声をかけられても智浩はそちらを眺めるでもなく、ただ生返事を返すのみだった。

「大丈夫？ 真っ青だけど」

「な、なんとか」

無理に言葉を発しようとするとなかなかに静まりかけていた吐き気がせり上がってくる。智浩はしゃべるのを中断し、片手を口に当ててこらえた。

初めて馬に乗った智浩は、馬上がこんなにも揺れるものだとは思いもしなかった。ものの十分もしないうちに平常ではいられなくなり、結局ミユールに頼んでゲイロンの歩調を落としてもらい、なんとか最悪の事態にはならずにすんだといったところだ。

「ゲイロンは疾いんだけど、乗り心地は確かにほかの馬に比べても良くないよね。乱暴な性格だから……」

ミユールはそう言って智浩に同情の意を示したが、本人はけろりとしている。

常日頃から乗っているのだろうから当然といえば当然だが、智浩は自分の体たらくに情けない気持ちでいっぱいだった。

学生時代から頭を使う方が好きだったが、決して運動が苦手だったわけでもない。それが初めてだったとはいえ、馬に乗つただけでしかもつかまつていただけだここまでぐでぐでになってしまふとは思わなかった。齡はとりたくないものである。

これからは、そこしさは運動もしよう……。

智浩はミユールの背にだらしなくしがみつきながら、そう心に誓っていた。

町の中へはいるとゲイロンの歩調も落ち着き、智浩もようやく周りを見回す余裕を持てるようになった。

石畳に舗装された道。三角屋根に赤レンガ、白しつくいの家。いつか紀行番組で見た、古いヨーロッパの町並みを思い出させる景色が続いている。

どこかのテーマパークに連れてこられたのだろうか？

智浩は未だに事態を飲み込めず、そんな風に考えていた。
だがそれにしては、道行く人影はまばらで、どこか陰気な雰囲気が街全体を覆っている。とても観光地の空気ではない。

そもそも、自分以外の人間はみな今の日本の街角で見かけたら地味すぎて逆に浮いてしまうような、質素な服装をしていた。観光客らしき人物は見あたらない。

「ここは、どこなんだ？」

智浩が問うと、前に座るミユールが振り返った。手綱は一応握っているが、彼女は先ほどからほとんど指示を出していない。ゲイロンが行き先を把握しているので、なにもしなくても勝手に進むのだ。だが、そもそもゲイロンが人語を解すこと自体が理解できていない智浩はあわてた。

「前を向きなさい」

「平気よ。ゲイロンは道を知っているもの」

「当然、ミユールの方は意に介さない。」

「ここはリボーテの街よ。さつきいわなかつた？」

「それは聞いたような気もするが……。私はそんな街を聞いたことはない。どこかの観光施設か？ 都道府県でいつたらどこになる？」

「トドーフケン？」 今度はミユールが首を傾げた。

「まさか、外国なのか？」 智浩は青ざめた。

薬か何かで眠らされて、船か飛行機に乗せられて運ばれたのだろうか。だとしたら、帰るのも一筋縄ではない。そんな考えが頭をよぎった。

だが、ミコールはそれを聞くと智浩にじと目を向けて。

「……おじさん、わたしの話、ぜんぜん聞いてなかつたでしょ。こ
こはおじさんがいた世界とは、別の世界なの」

「別の世界」

「そ。おじさんは特別な力を持った勇者として召喚されたのよ
「……すまないが、意味が分からない」

智浩は首を振つた。

「ええー、おかしいなあ……」

ミコールはやや大げさな動きで頭を垂れた。

「コーライチはこれですぐわかつてくれたのに……」

それはどちらかといえばひとりごとに近かつたが、智浩が反応し
た。

「ん、浩一といつたか？」

「え？ うん。コーライチよ。おじさん、やつぱりコーライチの知り合
いなの？」

「君のいっついると同一人物ではないだろ？ が、私の息子の名前
は浩一といつ」

智浩の言葉に、ミコールは会心がいったとばかりにうなずいた。

「やつぱり。だから新しい書を送る前に召喚があつたのね」

「どうこうことだ？」

「私の知つてゐるコーライチと、おじさんの子供のコーライチは、たぶん
同じ人物よ」

「それは」

智浩が疑問の言葉を続けようとしたとき、緩やかに歩みを続けて
いたゲイロンが止まつた。馬上はその拍子にまた流れ、会話に気を
取られて油断していた智浩はミコールの顔に突つ込んでしまつた。
「こちらを向いていたミコールの額に、智浩の額が正面衝突する。

「きやつ」

「うぐつ」

「うぐつ」と堅いものがぶつかる音が聞こえ、ふたりの視界に

星が舞い散った。

「いつたー……」

「す、すまない、大丈夫か？」

額を押さえて馬上で丸くなるミコールに、智浩はさすがに赤面しながらわびた。

「うう、だ、大丈夫」

ミコールはしばらく丸くなつたまま額をさすつていたが、やがてゆっくりと起きあがつた。

「もう、ゲイロンなんで急に　　あ、着いたのね」

ミコールの言葉で、智浩もあらためてあたりを見回す。

会話に夢中になつてゐるうちに、一階、三階建ての住居が連なつていた景色は消え、目の前にはひときわ大きな建物が建つていた。三階建てで高さはそうでもないが、ほかの建物に比べると横に大きい。一階部分は壁が取り払われて、奥の方まで見通せるようになっている。テーブルが多く並べられているのを見ると、食堂か酒場といつたところだろうか。

「じゃ、おかみさんを呼んでくるね」

ミコールはそういうと、ひとりでさつさと鞍を降りてしまつた。

「お、おい」

「すぐ戻つてくるから、待つてて」

戻惑う智浩にやう告げると、小走りで食堂の奥へと消えてしまう。智浩はひとり、馬上に残された。

と思つていたのだが、突然下から低い声が聞こえた。
「おいおっさん、いつまで乗つてゐつもりだ。重いだろ？」「

「なつ　　」

また馬　　ゲイロンがしゃべつたのである。

最初にいきなり話しかけられたときはたいそう仰天したが、それから上に乗つてここまで来る間はずつと口をきかなかつたので、ひょつとしたら空耳だったのではなどと智浩は思つていた。が、やはりそんなことはなかつたのだった。

智浩が固まっていると、ゲイロンはなおも挑発的な言葉を投げかけてくる。

「まさか、ミユールがいなけりや降りられないとかいうんじやないだろうな。いい齢したおっさんが

「なに？」

これには、さすがに智浩もかちんときた。確かに乗るときはミユールに手助けしてもらつてやつと乗れたのだが、降りるのは乗るよりも簡単なはずだ。

鞍のいちばん後ろだつた尻の位置を前にずらし、先ほどまでミユールが握っていた手綱をつかみ、左足をあぶみに乗せる。あとは自転車を降りる要領で右足を抜けばいいだけだ。

だが、智浩が勢いをつけて右足を抜いたとき、ゲイロンが身体を揺らした。

「う、うわっ」

手から手綱がすっぽ抜け、右足は地面についたもののそのままの勢いで後ろに転がりそうになる。

だが、智浩はなんとか左足をあぶみから抜き取ると、その足で踏ん張つて転倒を免れた。

「ちつ、こけなかつたか

その様子を見たゲイロンは、露骨に舌打ちする。

「おまえ、今わざとやつただろう！」

智浩は憤慨し、ゲイロンへと詰め寄つた。

「へん、あのくらいであわててんじゃねえよ

「なんだと！」

「そんなでかい声で騒ぐなよ。近所迷惑だろ？が

ゲイロンのその言葉に智浩ははつと我に返り、まわりを見た。気がつけば何人かの人人が足を止めて、遠巻きにしてこちらを見ていた。

思わず怒鳴つてしまつたが、まわりからしたら今の自分は「馬に向かつて本気で怒つている変人」に見えたのではなかろうか？

そう考へ、智浩は恥ずかしさに頬を赤くした。といつても、さつきまでも怒りで赤かつたのだが。

体裁を整えようと、咳払いしつつ胸元へと手をやつた。スーツを着て仕事をするようになつて長いので、無意識にネクタイを直そうとしてしまう、智浩のくせである。

もつとも、今はネクタイをしていないので、所在なげに指を動かしたあとポロシャツのしわを伸ばしただけで腕をおろすことになる。「なにとりつくろつてんだか」

ゲイロンがいやみな突っ込みを入れる。馬に馬鹿にされるのがこんなにも腹の立つことなのだと智浩ははじめて知った。

それに対して、みょうに見られているな。

街に入つてからここへ着くまでのあいだ、通りではそれほど人を見なかつたのだが、今は建物の敷地の外に十人前後の人があらわらと集まつている。そしてどうも、誰もがこちらを見てこゐるよつなのだ。

あるものは道を行き来しながらちらちらと、またあるものは露骨に、智浩のほうへと視線を送つてこる。しかも、徐々にその人数は増えているようでもあつた。

「ありや、みんなおまえを見に來てるんだぜ」

とまどい智浩に、ゲイロンがそういつた。

「異世界人はただでさえめずらしげし、前回のこともあるしな」

「前回のこと?」

ゲイロンの含みのある物言いに、智浩はおもわず自然にさうたずねていた。

「なにしろ前に來たやつは、まあ、そのへんの話はあとでヨーロー ルから聞けよ」

ゲイロンはいいかけてやめてしまった。

「なにをもつたいぶつていてるんだ」

「おまえとそんな話をしたつて、俺はちつとも楽しくないんだよ。それより、ちょっと近くに來い」

ゲイロンが前肢をかくよひにして智宏を呼んだ。

「噛みつかないだうな」

「男の頭なんか噛んでどうするんだ」

智浩は警戒しながらも、ゲイロンの馬らしく長い顔に自分の顔を近づけた。

すると、ゲイロンの表情が突然変わった。馬の表情にそんなにバリエーションなどないはずだが、智浩にはそれが忘年会で女子社員にセクハラをしているときの部長のものに重なつて見えた。

「なあ、どうだつた？ ミコールの抱き心地は」

ややひそめた声色まで、いやらしいものに変化していく。

「だき……なんだと？」

「あの森からここまで、ずっとあの子の腰にしがみついていたんだろ？ が。たいそう揺らしてやつたから、じかくさで胸を触るくらいはできたはずだぜえ？」

「なつ、おまえはなにをいつているんだ！」

確かにゲイロンのいうとおり、それなりの時間智浩はミコールの腰にしがみついていた。そのうえ途中からは気分が悪くなり、体重をかけないようになどと遠慮している余裕もなくなつた。

だが、相手は自分の息子ほどの齢に見える少女である。たとえ余裕があつたとしたところで、身体の感触を楽しもうなどと智浩が考えるはずもなかつた。

しかも今のゲイロンの言葉からすると、智浩が耐えがたいほど激しく揺れたのはどうやらわざとだつたようだ。

智浩が氣色ばむと、ゲイロンはたいそうまらなさうに鼻を鳴らした。

「まさか、本当にこにもしなかつたのか？ なつさけねえなあ

「私は既婚者だ！ だいいち、あんな少女に何かしようなどと思つわけがないだうー！」

智浩はまるで自分が痴漢あつかいされたかのよつて感じて激高したが、ゲイロンはまったくひるまなかつた。

「バカだなあ、こいつちでなにしたって、異世界の女にバレるわけないだろ？が。それに、ミコールは次の春でもう十五になるんだぜ。ふつうはそりそろ結婚相手を見つけるこりだ。今が食べじろじやねえか」

「冗談じゃない！」

来年で十五といふことなら、それこそ息子の浩一と同い年である。「胸はたしかにちつと残念だが、尻やふとももなんかは張りがあるてふりふりしててよお、たいそう美味うまいじやねえか。いいよなあ、人間は。あれをどうこりできるんだからよお……」

ますます怒る智浩を無視して、ゲイロンは自分の世界に入りはじめてしまっている。

「せめてさあ、鞍をはずして乗ってくれねえかな。これのせいでも、ちつとも感触が伝わっこないんだ。鞍がなけりや、あのふとももで俺の横腹をきゅつとはさんでくれて、しかも背中には股ぐらが……あー、想像するだけで発情期が来ちまいそうだぜ」

「こ、こいつは」

妄想をだだしゃべりにするゲイロンに、智浩は怒りを通り越してあきれていった。

じぱらぐしてミコールが戻ってきた。食事の用意をしているから中にこりうど、と智浩に告げる。

「ゲイロンはおとなしく厩舎で待つててね。今、馬装をはずしてあげるから」

ミコールはそういうと、ゲイロンの脇に立つて鞍を留めているベルトをはずしにかかった。智浩は、なんとなしにその様子を眺める。ゲイロンが「ちつと残念」という胸は、着ている服の生地が厚めであるせいもあってか、確かに外から見ている限りはあまり主張を感じない。といって腰のあたりはほのかにくびれも見えるし、まったく少女の体型というわけでもない。

と、そこまで考えてしまったところで智浩はあわてて首を振った。

つい、先ほどのゲイロンの妄想に引っ張られるようにしてミコールを観察してしまっていたのだ。

「どうしたの？」

あまり激しく首を振ったので、ミコールが不思議そうに智浩を見てそういった。なにも含みのない単純な疑問の言葉に、自分の視線には気づかなかつたのかと智浩は安堵した。

ゲイロンは気づいていたのか、ヒヒヒと下びた笑いがかすかに聞こえたが、とくに何もいわなかつた。

「へんなの」

ミコールはそれだけいうと、また鞍をはずす作業に戻つた。それほど背が高くないので、時折背伸びすることになる。

すると、ゲイロンがそれにあわせて首を下げ、下からのぞきこむよつにしていることに智浩は気づいた。

ゲイロンがしゃべる前に見たときはたまたまそう見えただけと思つたが、さつきの話を聞いた以上は間違いない。ゲイロンはミコールの短いスカートの中をのぞいているのだ。

気づいた以上放置する気にはなれず、智浩はゲイロンの視線を遮るようにしてミコールの隣に立つた。

「あ、てめー、こら」

ゲイロンが抗議するが聞き流す。

鞍をはずしおえたミコールは智浩が急に隣にきたので驚いたが、その向こうのゲイロンの表情を見て事情を察したようだつた。

「もしかして、ゲイロン！ またのぞいてたの？」

「いいじゃねーか、見るだけなんだからようー」

ゲイロンは口をとがらせて、子供のような抗議をした。

「よくない！ ……ありがと、トモヒロ」

「ん、ああ」

ミコールは笑顔で礼を言つたが、智浩自身直前のことがあるので、わざかながら気まずさをのこす返事になつた。

「ヒトの楽しみを邪魔しやがって」

「今日は犯罪だ。それに、おまえは馬だ」

ゲイロンがまた声を低くして智浩に言い、智浩も言い返した。
それを見て、ミコールが不思議がる。

「あれ？ でもふたり、いつのまにか仲良くなつたのね」

「仲良くはない」

「仲良くはねえ！」

智浩とゲイロンの返答は、見事なタイミングで重なつた。

やがて若い男性が智浩たちのところまで駆けてきて、馬を引き取るといつてきた。ミコールははずしあえた鞍を男に渡し、「じゃ、あとはお願ひ」といった。

男は両手で鞍をかかると、「さあ、じゅうちだ」とゲイロンに告げ、そのまま背を向けて奥へと進んでいく。

「さあ、めしだめし」

ゲイロンもそうした扱いになれているのか、縄で引かれる事もなくそつそつぶやきながら男についていつてしまつた。

智浩はその光景にもやもやとした違和感を拭いきれなかつた。しかし自分でもさつさまで確かにあの馬と言葉をやりとりしていたのだ。

やはり、夢を見ているのだろうか。

智浩が四十六年かけて培つてきた常識を納得させるいちばん簡単な答はそれしかない。だが、智浩ははつきりと田覚めているのだ。それは頬をつねるまでもない確かな事実だつた。

そういうても、気がついたら見知らぬ土地にいて、恐竜に追いかかれられしゃべる馬に出くわすという事態を論理づけて説明することもまた、智浩には不可能だつた。そんなことは起こり得ないということならじくらでもいえるが、現実には田の前で起こつてしまつているのだ。

結局のところ、理解の追いつかないことは考へても仕方がない、といつ結論に戻つてしまつた。

「じゃ、おじさんはじゅうちだね」

ミコールはゲイロンを見送つたあと、智浩にそう声をかけた。とにかく彼女の説明をもういちど聞いてみるほかはない、と智浩は彼女にならつて身体の向きを変えた。

そのとき、建物のかげにひつそりと立つ少女の姿が田に入つた。

つい先ほどまで、そんなところに人はいなかつたよつな気がする。

智浩は軽い驚きとともに少女を見た。

ミコールよりももうすこし幼く見えるその少女は、そのミコールと同じ金髪を肩の先まで伸ばしてくる。身につけているのは黒のドレスだ。

しかし、そんなことよりも智浩の心に深く残つたのは、宝石のように紅く輝く両の眼だった。

智浩は吸い込まれるようにして、その紅い瞳に視線を合わせてしまつ。

完全に目が合ひ、少女が妖しく笑つた。

その瞬間、幼いと感じた少女の印象が一変した。まるで妙齢の女性に微笑みかけられたようだつた。背筋を指先でなぞられたかのように、甘いふるえが智浩を襲う。

智浩と少女の間には五メートル近い間隔があいている。にもかかわらず、智浩は少女の吐息を感じた。熱のこもつた息を吹きかけられて、身動きがとれなくなつてしまつ。

「おじさん、どうしたの？」

捕らわれた智浩を救つたのは、ミコールの声だつた。

まるで湿りけのないその声で智浩と少女をつないでいた見えない糸は切れた。智浩は知らず知らずにずつとつめていた息を吐き出し、それからミコールを見た。

「いや、今そこに」

だが、そういうて再び少女の方を見やつたとき、ナレには誰もいなかつた。

「そこには？」

「……いや、なんでもない」

ミコールは少女がいたことにまつたく気がついていないようだつた。智浩は今の不可思議な体験をうまく彼女に説明できるとは思えなかつたし、事実だけをいうなら「いまそこに少女がいた」というだけのことである。結局、智浩は言葉を濁した。

ミコールも深く追求はしてこなかつた。智浩の実感としては少女に魅入られた時間は長かつたが、実際にはそれほどでもなかつたのだろう。

疲れているのかもしない。

先ほどから不可思議なことばかり起こつてゐる。智浩はいちど頭を振つたあと、ミコールについて食堂へと入つていつた。

広い空間に、木製のテーブルといすがいくつも並べられている。

その奥にはカウンター席もある。

だが、智浩が食堂だと思って入つたそこには客の姿はひとりも見られなかつた。

時計がないので正確な時刻がわからないが、太陽はまだ高く、まだ昼をいくらか過ぎたころと感じられる。遅い昼食をとつている人がいても良さそうなものだ。

定休日なのか、それとも味がひどくて繁盛していないのか。それとも、こんな造りだが店ではないのだろうか。

「やあ、いらっしゃい」

カウンターの奥から恰幅のいい女性が顔を出し、笑顔で智浩に声をかけてきた。

「どうも」

智浩はどう接していいか判断しかね、そんな曖昧な返事を返した。「このひとはリーニャさん。このおかみさんよ。おじさん、おなかは空いでる?」

ミコールに聞かれ、智浩は自分の腹に手を当ててみると。

そういわれれば、そこそこ空腹だつた。今朝は簡単なものしか口に入れていないし、恐竜に追われて全力疾走したり馬上で必要以上に揺さぶられたりと、近年なかつたほど運動もした。

「そうだな、すこし」

正直にそう答える。しかしすぐに、財布を持っていないことに思い当たつた。

そういうと、ミコールは笑つた。

「もちろん、いらっしゃるわよ。わたしが呼んだのだもの」

カウンターから近いテーブル席に向かい合つて腰を下ろすと、ほどなくしてリーニヤが食事を運んできた。

「こんなものしかないけど、たんと召し上がれ」

そういうて、木製の椀を智浩の前に置く。

椀のなかにたっぷりと盛られていたのは、数種類の豆を煮込んだスープだった。そのうえにやや大きめに切られた肉が三切れ乗せられている。

「お、おかみさん、私はいいよ」

あわてた声を出したミコールの方を見ると、リーニヤが彼女の前にも木の椀を置いたところだった。それにも豆のスープが盛られていたが、量は智浩のそれの半分ほどで、肉も乗つていなかつた。

「あなたも成長期なんだから、ちゃんと食べなさい。気にしなくていいから」

「でも」

椀を返そうとするミコールだが、そこで彼女の腹がぱつきりきゅうと鳴つた。ミコールは赤面し、リーニヤは優しい笑顔になつた。「ほら。魔法を使うとおなかが減るんでしょ? あんたに倒れられたらみんな困るんだから」

「う、うん」

結局ミコールは椀を受け取り、リーニヤは満足げな表情で下がつていつた。

「ダイエットでもしているのか?」

やりとりを見ていた智浩がそう聞いたが、ミコールはあいまいな笑顔を返しただけでそれには答えなかつた。

「じゃあ、いただきましようか。おじさんも、暖かいしね」

「ああ……」

取り繕つよくなミコールの様子になんとなく違和感を覚えつつも、

腹が減つていいるのも事実だったの、智浩はそれ以上追求しなかった。

やせる必要があるよ」には見えないが、年頃の女性だし、必要以上にダイエットをしたがるのも無理はないか。

そんなことを考えて自分を納得せむ、椀に添えられた木製のさじで湯気のたつ豆のスープをすくい、口に運ぶ。

「スープは、あつたりとした塩味だった。

かすかに肉でとつただしのような風味も感じるが、それほど複雑な味ではない。

「豆は種類によって若干食感に違いはあるが、やはり塩味しかしない。

はつきりといえば、それほどまぐもない、といつのが正直な感想だった。

肉をひと切れ口に運ぶ。やけにかたい肉だった。干し肉か何かなのだろうか。噛んでも噛んでも柔らかくならず、飲みこむのにひとつ苦労する。

どうやら、この店が繁盛していない理由は料理の腕前にあるようだつた。この料理をわざわざ食べに来る客がいるとは思えない。

それでも、じちそうされたものを残すのも忍びないと感じ、智浩はさじを動かした。

「あんまり口に合わない、って顔だね」

椀の中身が半分ほどになつたところで、声がかかつた。

食堂のおかみ、リーニヤが飲み物の入つたカップをふたつ運んできたのだった。

「いや、そんなことは……」

智浩は口もつたが、リーニヤはカップを智浩とミコールの前に置くと、気にしないでと笑つた。

「じつちとしても、お密さんに出す料理じゃないのはわかっているんだけどね。でも、仕方ないんだ。食材も香辛料のたぐいも、もうほとんど底をついていてね」

「食べ物がない？」

「ああ。アーロの群れのせいさ」

「アーロといふのは、確か……」

智浩は何時間か前に自分を襲おうとした恐竜の姿を思い返した。

「見たのかい？ あいつらは雑食でね。人も襲うし、煙も荒らすんだ。来る途中の煙の様子は見たかい？ ひどい有様だつただひつ」

「あ、ああ」

智浩はあいまいにうなずく。

街を囲う壁の外側に農地が広がっていたのは森を抜けたときに確認していたが、実際にその側を通りたときはゲイロンのせいでもふらふらだったの、はつきりと様子は覚えていなかつた。

「アーロどもが数ヶ月前から居座つていいせいで、街の作物は全滅、周辺の街から運んでもらおうにも邪魔をされる。この街は孤立してるので。それもこれも前にミコールが呼んだコーライチとかいつ

「お、おかみさん」

相手の様子などおかまいなしにしゃべり続けるリーニャを、ミコールが制止した。

「ああ、『めんよ』ミコール。あんたのことを悪くいったんじやなくて

「わかつてゐる。でも、私から話すから。』はん、『ちやうさま。とつてもおいしかつた」

ミコールはそういうと、空になつた自分の椀をリーニャに差し出した。リーニャはまだ何かいたそつたが、結局椀を受け取つてまた奥へと引っ込んでいつた。

智浩は、まだ半分残つているスープの椀を見ながら考え込んでいた。

リーニャの話が本当なら、このスープは実はとても貴重な彼らの食料だつたのではないか。

ミコールはかなり遠慮していだし、彼女の椀には肉がなかつた。昼時にも関わらず、食堂には他に人がいない。

智浩が食堂の外へと目を向けると、いつのまにか数十人単位の人々が集まって、遠巻きに智浩たちを見ていた。しかし食堂の中まで入ってくるものはいない。

背筋を冷たい汗が伝つていいくのを感じ、智浩はかすかにふるえた。このスープを食べたのは、失敗だつたかもしれない。

海外旅行でぼつたりバーへ入つてしまい、クレジットカードで数十万を支払わされた友人の話を思い出す。自分もこの後理不尽な要求を突きつけられるのではないか?

しかし、智浩は金を持っていない。それどころか財布もないということは先ほど伝えたのだ。

金でなければ、なにを要求されるというのだろうか。

「おじさん?」

下を向いて考え込んでいた智浩に、ミユールが声をかけた。

「な、なんだ!」

ミユールの口調はさきほどまで変わらないものだったが、智浩の方が警戒心から強い言葉がでた。

「なんだ、つて……詳しい話をする、つていつたじゃない。おじさんつて、あんまりひとの話聞かないわよね。大人なのに」

ミユールにあきれられ、智浩は言葉に詰まった。

「まあいいわ。あらためて、わたしはミユール・アスタス。この街の召喚士です。ここはおじさんが普段暮らしているのとは別の世界で、おじさんはわたしに召喚されて、ここへと喚ばれてきたの。ここまでは、いい?」

ミユールは念を押すようにたずねたが、智浩の長年かけて固まってきた頭脳は、まだ事態を理解しきれていないようだった。

「別の世界というのは、外国ということか?」

「……そう考えれば納得できるのなら、それでもいいけど」

ミユールはまたあきれた。大人というのはみなこのように頭が固いのか、それとも智浩が特別なのか。

「だが、君たちはみんな日本語をしゃべっているじゃないか」

「それは、召喚の際に自動的に魔法がかかっているのよ。私たちの言葉が、召喚してきたひとの母国語に自動で変換されて聞こえるの」

「君が自動翻訳機を持つていい？」智浩はとんちんかんな反応をする。

「……なんでもいいわ。会話には支障がないってことさえ理解してもらえれば」

「ふむ」

智浩は腕組みをして、ひとつ息をついた。

「それで、私をどうするつもりなんだ？」

「どうにかしてほしいのは、こっちなの」

ミコールは真剣な表情で、智浩に訴える。

「最初にいったでしょ。トモヒロには勇者として、この世界を救つてほしいのよ」

「世界を、救う？」智浩は首をかしげた。「私が？」

「そう」「ミコールはうなずいた。「あなたには、その力があるのよ」わずかな間、沈黙が流れた。

だが、智浩はすぐにミコールから視線をそらしてしまった。

「バカをいうな」

おもしろくもない、といつた態度だ。

「私はしがない会社員だ。特技といえば簿記くらいなものだ。私にできるのは社員の給料の計算や貸借対照表の作成であって、世界を救うなどという規模の大きさはどうとかの大統領にでも任せなければいけない」

「そんなことない。あの黒こげになつたアーロを見たでしょ」

ミコールは必死でいいつのつた。

「あれがあなたの力。この世界の人間では及びもつかない魔法の力よ。おじさんがその気になれば、山ひとつ碎くことだってできるようになるわ」

「私は生まれてこの方、魔法なんてものを使ったことはない。私を

扱いだつておもしろい」となんかないぞ。どうせあの恐竜も、恐竜が焼けてしまつたのも、なにかトリックがあるんだろう。大人をだますものじゃない。正直こいつはさへ

「だましてなんかいないわ。おじちゃん、どうしてわかつてくれ

ないの？」

「わかるもわからないもない。
魔法なんてでたらめを信じるのは
子供だけだ」

ていた。

「だつたらいいわ。証明してあげるから、ついてきて」

「ホールはそういうと、席を立つた。そして智浩がどうするのかを確認もせず、そのまま歩いて食堂を出ていったところだ。

「うるさい」待ちなさい

智浩は後を追うか一瞬ためらつたが、ここひとりになつても文無しのうえ帰り道もわからない。仕方なしに席を立つて、ニュールの後を追つた。

(5)

ミコールは食堂の裏手に回つていぐ。智浩がそれを追いかけていく。

さらにそのあとを、食堂の外で智浩を見ていた数十人の住民がぞろぞろとついていく。もちろん、一定の距離をあけて。

食堂の裏手は、ちょっとした広場の空き地になっていた。建物が建つ予定だったのか舗装はされておらず、土がむき出しになつている。

奥の方には木造の建物が見える。位置関係からすると、ゲイロンが向かつた厩舎だろうか。

ミコールは空き地の端に、食堂の建物を背にして立つた。

智浩が追いつくと、やや挑戦的な目つきで見返してくる。

「いまから、魔法を使ってみせるわ。言葉で説明してもわかつてくれないなら、実際に見てもらうのがいちばんだものね」

そういうと、ミコールは智浩に正対し、両手を大きく広げた。

「わたしが何にも道具を持つていなつてこと、しっかり確認して」智浩はミコールの言葉に従つて、彼女を観察する。確かに、なにも持つていない。袖口が広いので、その気になればそこに何か入れることは可能だろうが、ミコールは自分から袖をまくつて見せた。しばらくすると、今度は背中を向ける。

「わかった、十分だ」

智浩がそういうと、ミコールは智浩へとむきなあつた。

「火の魔法を使うわ。あぶないから、すこし下がつて」

智浩を三メートルほど下がらせる。そのさらに十メートルほどしきにいる野次馬たちも、智浩が下がるのにあわせるように後ずさつた。

ミコールは一度深呼吸をし、それから空き地の向こうへ、街と外を隔てている高い外壁を指さす。

「あそこへむかって火の玉をとばすわ。わたしの指先を見ていって」
そしてミコールは押し黙り、精神を集中しはじめた。

右手の指先で銃を形づくりのよつな、少々こどもっぽいポーズだ。
智浩はマジックショーンの種をさぐるよつな気持ちでいた。指先を見て、といわれてその通りにしていたら、なにか仕掛けがあつても見逃してしまっただろう。むしろ空いている左手があやしい。

あるいは、的にしている外壁のほうだろうか。智浩たちからは一十メートルほどの距離があり、あそこに仕掛けを施してあってもここからは見えないかもしれない。

ミユールが一度、二度と深い呼吸を繰り返す間、智浩はそんなことを考えながらあちこちに視線をとばしていた。
だがそれも、短い間だった。

「em , avia」

ミユールが重々しく口を開き、呪文を唱えはじめたその途端。外壁にむけられた彼女の指先が、強く輝きだしたのである。

「な、なんだ？」

智浩は思わず声を出し、目を細めてその光を見た。
彼女がその手になにも持っていないのは、先ほど確認したばかりだ。あやしいと思って注視していた左手は握りこぶしなつてはいるが、腕は下げられたままだった。

太陽の光の加減だろうか、と智浩が立ち位置をすこし変えても、まばゆい光はかわらない。むしろ、すこしづつ輝きを増し、直視が難しくなつてきていて。

光は間違いない、その指先から発生していた。何の種も仕掛けもないに。

「q.i an」

ミユールが続きの言葉を唱えると、光が収束しはじめた。

「a n n u！」

そして最後の言葉とともに、ミユールは光を集めた指先を軽く振りあげ、振りおろした。

すると、光は爪ほどの大ささまでまとまつたあと ぽんつと氣が抜けたような少々かんだかい音をたてた。

それとともに、光のかたまりはごぶし大ほどの大さの火の玉となり、ひょろひょろと前方にむけて飛んでいく。

火の玉はミュールが的としてしめした外壁まで届くことなく、十メートルほどとんだあたりで消えてしまった。

智浩はその様子をしつかりと見ていたが、なんのリアクションもとれない。

「はあっ、はあ、はあ」

ミュールは激しい運動をこなしたあとのように、両手をひざにつき、肩で息をしている。野次馬たちも静まり返り、しばらくは彼女の荒い呼吸だけが空き地にひびいた。

やがて口中に溜まった唾液を飲み込んだミュールは、顔を上げて智浩を見るといつた。

「ど、ど？？」

「ああ」

智浩もど？答えたものか、言葉をさがしている。

すると、代わりに背後から歓声があがつた。

智浩についてきていた数十人の野次馬たちだ。

「いやー、やつぱりミュールはすげーな！」

「あれだけの火の玉出せるなんて、異世界人でもないのに……」

「ミュールちゃんはこの街の誇りね」

口々にそんなことをいつているのが智浩のほつまで聞こえてきた。

「なんというか、すごいな」

智浩が野次馬のほうを見ながらいつたので、ミュールは赤面した。「たしかに、実際に火を現出できる魔法使いは数が少ないんだけど そうじやなくて、魔法！ 仕掛けなんかなかつたでしょ？」

「 そうだな」

智浩はうなずかざるを得なかつた。

ミュールの言葉にあわせてなにもない空間から光が集まり、それ

が火の玉に変わった。その光景を、智浩は一番近いところで見ていたのだ。自分の目を信用しないわけにはいかなかつた。

だが、そのわりに期待はずれ感が残るのは、光の集まる光景が神々しいまでに感じられたわりに、出てきた火の玉はひょろりと頼りないものでしかなかつたからだらうか。

火の玉を出し終えたあのミコールの疲労困憊ぶりも、成果に対して支払う労力が大きすぎるよつに見えた。

「じゃあ、次は智浩のばんね」

「なに？」

ようやく息の整つたミコールにいわれ、智浩はきょとんとした。
「自分の指先から火ができるのを見れば、もう疑いようなんかないでしょう？」

「それはそうだが　君の様子を見る限り、そんな簡単にできるようには見えないな」

智浩は戸惑つたが、ミコールは表情を引き締めて彼に告げた。

「あなたは、特別なの」

他人からいわれることなどそつそつないことをいわれて、智浩はそれ以上反論できなくなつてしまつ。

「正確には、あなたたちは特別、といつほうが正しいのかもしれないけど　。でも、あの森で一口を焼いた炎の威力を見て、あなたはきっとなかでも特別な力を持つていると思うわ。いちど試してみて。それできつとわかるから」

「う、うむ」

ミコールが智浩の右手をとつた。なんということもないはずだが、智浩は頬のあたりに血が上つてくるのを感じて、その熱を振り払つようになづいた。

「ありがと」

ミコールが笑顔をむけ、智浩は顔を逸らした。

「あそこをねらえればいいのか？」

照れ隠しに、そんなことをいつ。

「うう。ねらこは田と手でつけるの。だいたいでいいわ。精靈に伝わりさえすれば、あとは彼らがやつてくれるから」

「精靈？」

「火や水をあやつる魔法は、それぞれの精靈に力を借りて使うのよ。呪文は彼らに指示をするための言葉。魔法の威力は、どれだけ多くの精靈に呪文を聞いてもらえるかで決まるの」

「あ……」

ミコールが実践して見せたあとなので、智浩も先ほどよりは彼女の言葉を聞く構えができるはいるのだが、聞いてすぐに理解するには彼女の説明は観念的すぎた。

「とりあえず今は、細かいことは考えずに。右手を構えて。そ

う

ミコールも智浩が理解できるとは思つていなかつたのか、気にせずニ智浩に構えをつくるせん。

「手の回りに集まつてゐる精靈に、お願ひするような気持ちで呪文を唱えてみて。いい？ e m , a v i a , q i a n 」

「Hン、アビア、チHン……」

智浩は素直にミコールの言葉に続いたが、やはり気恥ずかしさもあつた。ミコールの発音をそのまままねるといつよりは、英文をむりやり日本語発音したよつなたどたどしい発音になる。

ミコールが呪文を唱えたときはこのあたりですでに指先に光が集まつていたが、今はまだなにも起こらない。

この時点で智浩は、ミコールのこつていることがまったくのたらめだとも思えなくなつていたが、といつて自分が本当に魔法とやら使えるとも信じられなかつた。

それでも、いちじくらには彼女のいふとおりにしてみるのもいいだろうと思い、ミコールに続いて最後の言葉を口にする。

なにも起こらない、と思つたのは言葉を口にし終えるそのときまでだった。

最後の音が智浩の口を抜けた途端、智浩は右手を強烈に引っ張ら

れるように感じて、両足を踏ん張った。

見れば、直前までなにもなかつたそこに、人の顔ほどの大きさの炎のかたまりができあがつてゐる。さきほどミコールが出した火の玉とは比べものにならないものだつた。

「すうい……」ミコールの声が聞こえた。

智浩ももちろん驚いたが、それよりもこの炎をなんとかしてしまいたくて、的になるべき外壁へと再び目を向けた。

だが、その場所を見た智浩は今度こそ驚愕し目を見開いた。

いままさに智浩が炎をぶつけようとしているそこに、少女がひとり立つっていたのだ。

流れるような金髪と、紅い瞳をもつ少女。

食堂に来る前に見かけた少女に間違いなかつた。

「なつ

智浩はあわてた。だが、すでに発動した魔法を止めるすべなど知りはしない。

ねらいをはずす余裕もなかつた。

智浩の右手にあつた炎は次の瞬間、炎の束となつて今まで少女が立つそこへ飛びかかつたのだ。

火の玉などというレベルではない。

人間が巻き込まれれば間違ひなくただではすまない業火のかたまりが少女を襲う。

だが、少女は戸惑いも逃げもしない。
まさに業火が到達するそのとき。

少女は智浩を見て、また妖しく笑つたのだ。

さきほどよりもずっと距離が離れているのに、まるで目の前でそうされたかのように、智浩の脳裏にはつきりとその表情が刻まれた。そしてその直後、智浩の放つた炎が外壁にぶち当たり、壁は大きく音を立てて崩れてしまったのだった。

もうもうと煙の立ちこめるそこを、ミコールも、周りをとりまく野次馬たちも、あっけにとられて見つめていた。

街と外を隔てる堅固な外壁が、たった一発の魔法によってあえなく崩れてしまったのだ。もちろん、壁全体が崩壊したわけではないが、人ひとりくらいなら余裕で通り抜けられそうな穴がしつかりできあがってしまっていた。

その魔法を放った張本人である智浩は、魔法の発動が終わって身体の自由を取り戻すや、崩れた外壁にむかって駆けだした。

「ちょっと、おじさん？」

ミコールの呼びかけも無視して、崩れたレンガが積みあがった場所まで駆けつけた智浩は、小さな山となつたレンガを取り除きはじめた。

熱で溶かしたというよりは圧力で吹き飛ばした形ではあったが、強烈な火炎を浴び、ところどころは黒こげになつているレンガの山である。

「熱！」

当然、素手でさわれば熱い。

だが、そんな簡単な理屈にも考へが及ばないほど、智浩は動転していた。

「おじさん、どうしたの？ 大丈夫？」

ミコールが側へきて声をかける。

「どうしたのって 気づかなかつたのか？」

智浩は強い口調で彼女を問いつめた。

「今、ここに子供がいたんだ！ わ、私は、あの子を、巻き添えに

」

「子供？」

ミコールは首をかしげる。

「子供なんかいなかつたわ。人がいるところに魔法をうたせるわけないでしょ？」「だが、確かに見たんだ！」

智浩は大量の汗をかき、声はうわずっていた。すくなくとも冗談でいつているわけではないと感じたミユールは、意識して落ち着いた声をだし、智浩をさとした。

「あのね、トモヒロ。こまこの街に、わたしより年少の子供はいないのよ」

「子供は、いない？」

「そう。アーロがこの街を本格的に包囲しはじめたころ、子供とお年寄りだけはなんとか脱出させたの。成人していない人間で残っているのはわたしだけ。だから、子供の姿を見るはずなんかないのよ」「そう、なのか？」

その後、すこし時間がたつてから、崩れたレンガの山を取り除いてみても、やはり子供の姿はなかつた。

「幻覚だつたのか？」「

「はじめて本格的に魔法を使つたから、ちょっととしたトランクス状態になつたのかも知れないわ。なんどか試せばなれるわよ、たぶん」ミユールは気楽にそういった。

「あんなにはつきりと見えたのだが。肩まである金髪に、紅い瞳の

「

「紅い瞳ですつて？」

しかし、智浩が少女の特徴をつぶやいた途端、ミユールの態度が一変する。

「あ、ああ。宝石のようなきれいな目をしていたんだ」

「金髪に、紅い瞳」「

ミユールはしばらくな顔を閉じ、考えるようなそぶりをした後でいつた。

「よく聞いて、トモヒロ。そいつこそがいま世界を混乱させている

張本人 魔女のひとりなのよ

「この世界にはいま、三人の魔女がいるの」

ミコールと智浩は、食堂へと戻つてきていった。野次馬たちは相変わらず、食堂の外からふたりを というよりは智浩を観察している。ただし、崩れた外壁の応急修理に何人かが空き地に残つたため、数はすこし減つていた。

「そもそも、魔女とは？」

智浩が質問する。先ほどまでの体験で、智浩自身もようやく、これが自分が普段暮らす世界とは異なつたルールのある世界だということを理解しはじめていた。

「この世界には古くから魔法の概念があるけど、実際にその力を使ひこなせる人はとても限られている。わたしはこれでもこの地方では有数の魔法使いだといわれているけれど、それでも、たとえば火の魔法ならさつきの火の玉がやつととというわけ。 だけばまれに、強力な魔法を使ひこなせる女性が現れることがある。それが魔女という存在よ」

ミコールはいちど言葉を切つた。智浩がちゃんと話についてきているのか不安になつたのだろう。

「続けてくれ」智浩は先をうながした。

「魔女には軍隊も無力よ。だからたいていの場合、魔女が出現すると国が取引をするの。郊外に屋敷を与えて自由な生活を保障する代わりに、国が被害を受けるようなことはしない」というような

「それで納得するのか」

「結構するみたい。魔女は人嫌いが多い、つていうし……。でもなんかには取引に応じない魔女もやっぱりいるわ。今回はこっちね。しかも悪いことに、三人の魔女の間でいちばん強いのは誰だ、みたいな魔女同士の争いが始まっちゃつて、あちこちで混乱が起きている

の

「すると、その……アーロというのが街道を占拠しているのも、魔女のしわざというわけか」

「そう。『魔物使い』シトラの能力ね。ただ、これは魔女同士の争いといつよりは、わたしをこの街に閉じこめておくのがねらいみたい」

「君を？」

「さつきもいつたように、魔女相手には軍隊をぶつけてもムダ。魔法でいいようにされるだけよ。でもだからといって取引に応じずあはれる魔女を放ってはおけないでしょ。そのための切り札が、わたくしたち召喚士なの。異世界から魔女以上の力を持つひとを呼び寄せて、魔女を退治してもらつのもよ」

「なるほど。だが、それは君を閉じこめておく理由にはならないようだが」

ミコールに召喚の力があるのなら、閉じこめるのではなくその能力を封じる必要があるはずだ。

「あー、それは……」ミコールはすこし恥ずかしそうに鼻の頭をかいた。「わたしは、召喚士としてはまだ半人前なの。送還（おくりとどける）はできても召喚（よびよせる）はできないのよ。それで、お師匠さまに書いてもらつた召喚の書を異世界へと送つて、それを読んだ人にこちらへきてもらつというかたちを取つているわけ。お師匠さまはこの街からだいぶ遠い山奥に住んでいるから、わたしがこの街にとどめられている限り、新しい異世界人は召喚できないはずだったのよ」

「だが、私は？」

「なんらかのイレギュラーがあつたのね。よかつたら、この世界にくる直前のことをおしえてくれない？」

「この世界にくるまえ

ミコールの問いにこたえて、智浩はこの不可思議な体験の発端がどうであったかを思い返しあげ始めた。

今朝 もうすこぶんまえのことのよつとも感じるが、間違いな

く今日の朝のことだ。私は久しぶりにゆっくりとした休日の朝を迎えていた。

ここしばらくは残業や休日出勤も多く、あまり家族と会話もしないなかつた。そこで今日は一日家族サービスに徹することにし、妻とは午後から買い物につきあう約束をしたんだ。

ひとり息子の浩一は部屋から出てこない。明確に反抗期というほどでもないが、思春期の息子とは妻以上にコミュニケーションをとつていてない。さすがにこれではいかんだろうと思い、小学生の頃以来、久しぶりにキヤツチボールにでも誘つてみるかとラフな格好に着替え、息子の部屋のドアをノックしたのだが　返事がない。

外へでていつた様子もなかつたし、不審に思つた私は何度もノックを繰り返したあと、ドアを開けたんだ。

息子の部屋に入ったのは本当に久しぶりだった。

ちいさい頃使つていたプラスチック製の赤い空バットは見あたらなくあつていて、かわりにサッカーボールがあつたし、机の上には男性向けのファッショング雑誌なんかもあつて、私は軽く驚いた。

息子はやはり部屋にいなかつた。こつちがトイレにでも入つているうちに出ていつたのだろうか。いまあいつがどんなものを持んでいるのか知りたい気持ちはあつたが、親に勝手に部屋に入られたと知つたらきっと機嫌を悪くするだろうと思い、すぐに出ようとしたんだ。

だがそのとき、床の上に無造作に置かれていた一冊の本が目に入つた。

真っ白な表紙に、横書きで表題らしきものが書かれている。

毛筆で書かれたように見えるその文字はひどく達筆であるいはあまりにも乱雑で　なんと書かれているのかはわからなかつた。やけに分厚い、五百ページくらいはありそうなハードカバーの本だ。

私は抑えがたい好奇心が沸き上がつてくるのを感じていた。マン

ガ、ゲーム、スポーツ、ファッショニ 息子が興味を持つていうなどの事柄にも当てはまりそういうのないその本。いったいなにが書かれているのかと知りたい気持ちでいっぱいだつた。

しばらく葛藤したあと、ついに私は欲望に負け、その本を拾い上げた。すこしのぞいて、元のように戻しておけば気がつかれないだろうとそう思いながら。

左手で本を持ち、右手で表紙をめくる。最初のページにはなにも書かれていなかつた。

続いてもう一ページ、めくらうとしたとき 。

突然、風が吹いたように本がひとりでにぱらぱらとめくれだした。私の記憶では、息子の部屋の窓は閉まっていたはずなのに、だ。

それが収まつたとき、開かれていたページは一面、真っ黒だった。私は、わけもわからずその真っ黒なページを見つめ 。

気がついたときには、草木の茂る全く知らない土地にいたんだ。

「といふことは、あの本が 」

「お師匠さまが書いた、召喚の書よ」

智浩の言葉に、ミュールがうなずいてこたえた。

「ここは、本の中の世界なのか？」

「そりじゃなくて、本という媒介を通すことにより安全に異世界どうしをつなげているのよ。……まあ、この辺はこの世界でもじく一部のひとしか理解していない理謬だから、おじさん理解できなくとも無理はないけど」

「いずれにせよ、好奇心に負けて本を開いたせいで、このおどぎ話のような出来事に巻き込まれることになつたのは確かにようだつた。智浩はため息をつく。

「だが、先ほどの話では、その召喚の書とやらを新しく送ることはできないということだつたが」

「その通りよ。だから、そこにあつたのはおじさんの前にこの世界

に召喚された人物がつかつた書なんだと思つわ

「私の前に」

「おじさんの前に私が召喚した人物は、コーディーと「う名前だつたの」智浩は、ゲイロンに乗つていたときにはすこしそんな会話が出ていたのを思いだした。

「それが、私の息子の浩一だと？」

「状況からいつて、間違いないと思うわ。ふつひ、召喚の書はいちど発動するとロックがかかつて、ほかの人物が読んでも発動しないようになるの。でも、肉親ならロックをすりぬけることもありますかもしれないし」

「ふむ」智浩は腕組みをして考えている。

「そうだとして、その男はいまどきにいる？ 実際に会えば私の息子かどうかはいっぱつでわかるが

「あ、それは

智浩の問いに、ミコールは口ごもつてしまつた。

「どうした？」

「えーっと、それはちょっと、無理な」

それまでしつかりと田を見て話していたミコールが、急に視線を逸らし、ひどく言ひづらそうにしている。智浩の背筋が泡だつた。

「まさか、ひょっとして、死ん」

「あ！ ちがうの、そうじゃないの！」

「じゃあ、どうして会えないんだ！」

智浩の最悪の想像ははつきりと否定したものの、それでもやはり会えない理由は口にしようとした。

智浩が腰を上げミコールに詰め寄りつとしたとき、カウンターの方から声が聞こえた。

「なんだい、あこつはあんたの息子だったのかい！」

食堂の女将、リーニヤが盆に素焼きのグラスをひとつせ、やついいながらこちらに歩いてくる。

グラスを智浩とミコールのまえにひとつずつおさ、自分もミコー

ルのとなりにびっかと腰を下ろした。もうひとつグラスは自分用らしい。

グラスからはほのかに酒のにおいがした。色からするとぶどう酒だろうか。

だが、智浩が気になるのはグラスの中身より自分の息子かもしれない男の行方だ。

「あんたは、その その男がどうなったのか知つていいのか？」

「知つているもなにもないさ」

リーニヤはグラスをあおった。

「この街の住民ならみんな知つてる。ミュールが言つにくやうにしているからあたしが代わりに言つてあげるけどね、あいつはこの子を裏切つて、魔女に寝返つちまつたのさー。」

(6) (後書き)

お読みいただきありがとうございました。

なかなか話が進まないですね。やつと現状説明か……。

おじやん、もうすこしものわかりを良くしてあげるべきだったかな。

ご意見、ご感想などありましたらぜひお聞かせください。

「寝返ったとは、『ひづり』」

「そのままの意味だよ」

戸惑う智浩に、リーナヤが仏頂面を返す。

「魔女を退治してもらうために呼び寄せたのに、あこつ自身が自分の力におぼれて、魔女と一緒になつて暴れまわることを選んでしまったのさ。しかもこの街を出るときに、この子にひどく侮辱を」

「おかみさん」

酒の力もあるのか、ひとりでどんどんしゃべり出すリーナヤをリュールが止めた。

「ああ、『めんぶ』リュール。余計なことまでこいつにひだつた『わたしはいいけど……』

ミコールの視線の先で、智浩が渋面をつくりつつている。

「私の息子　かもしれない男が、そんなことを？」

「コーリチは、この世界を夢のようなものだと考えてしまったみたいなの。いくらでも好き放題に、自分の欲望のまま行動しても問題ないと思つてしまつたのね。たしかに、こちらの世界がどういうことになつても、本来接点のないあなたたちの世界には影響はないから」

「むう」

「トモヒロはわたしのいうことを理解してくれるまでに時間がかかつたけど、『コーリチはわりとあつたり理解してくれたの。だから、わたしもすこし油断してしまつたのね。』コーリチは基本的な魔法の使い方をマスターしたところでの街を出でていつてしまつた。送還の書をもつて」

「送還の書？」

「わたしが書いた初めての魔法書……それがあれば、わたしが儀式を行わなくとも、自分の意志で元の世界に帰ることができるもの」

「『』の世界で好き放題やって、やばくなったり面倒になつたりしたら、そいつを使ってわざと帰つちまおうつて腹づもりなのさ、あいつは」

最初に会つたときは愛想のいい中年のおばちゃんといった印象だつたリーやが、いまいましげに毒づいている。その対象が自分の息子かもしれぬと思うと、智浩の胸は痛んだ。

「まさか、私の息子が……」

「信じられないのも、無理はないと思つたが。でも、本当のことなの」

自分の息子がそんなことをするはずがない、と一喝できたならどうほどいいだろうか。だが、智浩にはそうすることができなかつた。ただでさえ、子育ては妻に任せきりだつたつえ、息子が中学にあがつて以降は自分も仕事の忙しさが増し、ますます接点がすくなくなつていた。

自分の息子がいままにをどう考へ、どう行動するのか。その程度のことやえわからぬのだと、智浩はいま思い知らされていたのだった。

「『』イチは魔女シトラの誘いに乗つて街を出ていったあと、シトラに指示をしてこの街を一口に封鎖させたのよ。そいやつてわたしを身動きのとれない状態にしてから、今は南の方で好き放題に暴れているらしいわ」

「……そのシトラといつのが、私が見た少女なのか？」

「紅い瞳は魔女に共通の特徴なの。もともとの瞳の色に関わらず、能力が覚醒するとそうなるのよ。でも、おじさん見たのはシトラではないわね。シトラには監視をあざむいて街に侵入するような能力はないし、まず、少女ではないもの」

智浩はほんのわずかだが、ミコールの言葉にとげのようなものを感じた。

「だから残りふたりの魔女のうちどちらかだとは思うけど、どちらまではわからないわ。『幻術師』スウリイは黒髪の魔女だけど、

そのふたつ名のとおり他人をあざむくのはお手のものだし、もうひとり『探求者』パスクミコルは、あれも少女なんかじゃないけど、自分の外見を変化させる秘術を使うらしいから、その気になれば子供の姿をとることもできるんじゃないかしら

「ずいぶん、魔女を嫌っているんだな」

「えつ？ そ、そりやそうでしょ、もちろん」

魔女の特徴を語るミコールに、なんとなくさきほどコーライチを毒づいていたリーニヤが重なり、智浩が思わずそういうと、ミコールはすこしあわてたようにそこへたえた。

「この街の人を閉じこめてるのもそудだし、あっちこっちで関係のない人に迷惑をかけているのよ。好きな人なんていないわ」

その理由はもつともで、智浩も納得できるものだったが、それにしてもミコールがずいぶんうろたえているようなのが気になる。

「ど、とにかく」

ミコールはひとつ咳払いをしたあと、やや強引に話題を戻した。

「おじや　トモヒロには、三人の魔女の退治に協力してもらいたいの。もちろん、これはわたしが契約しているこの国、ペルメリカ王国からの正式な依頼よ。受けてくれればこの世界に滞在中の費用はすべて王国がもつし、報酬もあるわ」

「依頼、ということは断ることもできるのか？」

一方的に呼びつけたくせに、とつい一コアンスを言下に感じて、ミコールは表情を曇らせる。

「もちろん、契約は双方の同意が大前提よ。それに、断つても元の世界に送還するまでの滞在費を請求したりもしないわ。ただ、送還の儀は満月の夜にしか行えないから、いまだと一ヶ月くらい待つてもらつ」とになるけど

「一ヶ月！」

智浩は思わず叫んだ。

「それは困る。そんなに長い期間会社を休んだら大問題だ。いやそれどころじゃない。しかも無断欠勤だぞ。理由を聞かれて『異世界

に行つていきました』なんて答えて受け入れられるはずはないし

「おじさん、落ち着いて」

取り乱した智浩をミユールがあわててなだめる。

「この世界とおじさんの世界では時間の流れかたは一緒にじゃないし、送還の儀では場所だけじゃなくて時間の指定もできるから、こっちでどれだけの期間を過ごしても、戻るときは召喚されたときと同じ時刻に戻れるはずよ」

「本当だらうな？」

「本当」のはずだけ……」

ミユールも理屈でそう知つていいだけで、当然自分で確かめたわけではない。おもわず口ごもってしまう。

見かねたリーニヤが助け船を出した。

「落ち着きなよ。いい大人が、みつともない

「しかし」

「コーエイチがこの街にきたのは一ヶ月は昔のことだよ。あんた、自分の息子が行方不明だなんてひとこともいっていなかつただろう?」
リーニヤにぴしゃりといわれて、智浩は言葉に詰まつた。確かに、昨日までは浩一は家にいたはずだ。いくら接点が少ないとほりつても、それくらいはわかる。

「確かに、それはそうだが」

智浩はまだ納得がいかないといった具合だったが、リーニヤはたたみかけるようにして反論させない。

「なら、ミユールのいってることは本当なのさ。なんだい、大の男が帰つたあとのことばかり心配してグチグチと。この子はね、まだ成人まえだつていうのに、この国唯一の召喚師としてそりやあもうがんばつてるんだ。こんな健気でいい子にお願いされて、いつちよやつたらうつてな気持ちにならないもんかね!」

酒のグラスを空にしたリーニヤは頬を紅潮させて智浩に迫る。その剣幕に智浩はすっかり押されていた。

グラス一杯でここまでなるとは、よほど強い酒なのか、はたまた

リーニャが弱いのか。

「お、おかみさん」

ミコールが今度はリーニャをなだめるが、リーニャは聞かない。しゃべつているうちにどんどん酔いが回ってきているようだ。

「本当にミコールはいい子なのねえ。あたしに息子がいたら、ぜひともお嫁にほしくらいだよ。それをあのクソガキ、同じ年のくせに子供に興味はないだのなんだの、まったくガキはどっちだって

すっかりたががはずれてしまったリーニャはその後もしゃべりつけ、最後はミコールに引きずられるようにしてカウンターの裏へと押しやられてしまったのだった。

「あ、あのー……おかみさんのいってたことは、あまり気にしないでね」

ひとりで戻ってきたミコールは智浩のむかいに座り直すと、恥ずかしそうに下を向いた。

「依頼を受けるか、決めるのはトモヒロよ。トモヒロの魔力はさつきみただけでも明らかにけた違いだけど、それでもまったく危険がないという保証はできないし」

「私としては」智浩は落ち着きを取り戻していた。先ほどリーニャの様子にあてられた部分が大きかつたが。「君たちのこのリーニチが、本当に私の息子なのかを確かめたいのだが」

確かに、息子の部屋に落ちていた本を開いて智浩も召喚されたのだから、同一人物だと考える方が自然ではある。

だが、智浩にはリーニャの態度を見て、自分の息子がこれほど他人に嫌われる行動を本当にとったのか、了解しきれない部分がどうしても残っているのだった。

「コーリーは、いまはシトラと行動をともにしているはずよ」

「では、そのシトラとやらに会こにいけば

「ううん、その必要はないと思う

ミコールの言葉はやけに確信に満ちていた。

「どういふことだ？」

「さつき、智浩がみたつていう魔女 スウリイカパスクミコールだと思つけど、間違いなく智浩を偵察にきたのよ。あらたに異世界人が召喚されたのを、向こうも感づいたのね。三魔女はネットワークを持つているはずだから、ひとりが気づけば当然」

そのとき、ミコールの言葉をさえぎるよつて食堂の外がざわついた。

見れば野次馬をかきわけながら、男がひとり中に入つてくれるところだつた。ミコールの表情が曇る。

「まさか、もう？」

「ミコール、大変だ！」

男は智浩には一瞥をくれただけで、ミコールに向かつて大声を出した。

「アレクさん……」

「シトラのやつがきた！ アーロを何十匹も従えて、正門を包囲してやがる…」

アレクと呼ばれた男の言葉で、野次馬たちも騒ぎだした。

「シトラだつて？ 大変だ！」

「ついに俺たちを食つちまうつもりなのか？」

「男どもは武器庫にいけ！ 急がねえと侵入されちまうぞー。」

口々に叫びながら、食堂に背を向け走つていく。

「ミコール！」

「すぐになります」

ミコールが緊張した声で答えると、アレクもすぐにまた走り去つた。

「シトラが来たなら、コーラーも一緒にいるはずよ」

ミコールは立ち上がり、智浩を見下ろした。

「依頼を受けるかはあとでいいわ。いまは一緒に来て。シトラはあなたを見に来たの。あなたが出ていかなかつたら、アーロを使って

強行突入してくるかもしねない」「わかつた」

智浩も席を立った。

「もし本当に私の息子がそこにいたなら、依頼を受けよう」「いいの?」

「息子が人の道を踏み外そうとしているのなら、それを修正してやるのも親のつとめだ」

「もし、あなたの息子さんじゃなかつたら」「ミコールは一抹の不安を感じて智浩を見上げた。

「そのときは、そのときで考える」

智浩はミコールを見ずに答えた。

「だが、そうだとしたら君たちの説明にはおかしな点があるといふことだ」

「うそなんてついてないわ

ミコールがそういうても、智浩は視線を向けなかつた。

「私は子供じやない。感傷に流されて勢いだけの判断はしないつもりだ」

そのころ、街の正門。

そこは頑丈な鉄の扉がしつかりと閉じられており、何者も出入りができないようになつてゐる。

当然、魔女シトラが従えてきたアーロの群れも一気に突入することはかなわない。

だが、さきほどから何体ものアーロがかわるがわる鉄扉に体当たりを続けており、そのたびに扉がきしむ音を立てる。その音は少しずつ大きくなつていた。

アーロの群れの先には、巨大な亀のような怪物の背中にしつらえた輿に乗つて、ふたりの人間が高みの見物をしている。

ひとりは蒼く染めた髪を背中まで伸ばし、胸元の大きくあいた黒のドレスに身を包んだ女性。

もうひとりは、この世界では一般的な薄い青色に染めた長袖の胴衣に、刺繡の入つたいくらか上等な上衣を羽織り、ゆつたりめのズボンをはいたまだ年若い少年である。

女性は魔女・シトラであり、少年は異世界人コーキチであった。

「ほらほら、はやくミコールを呼んでこないと、扉が破られちゃうわよー？」

シトラは正門のうえの見張り台にいる男たちにそう声をかけると、心底楽しそうに胸を張つて笑つた。それに合わせて、『血慢の巨大な乳房がゆさゆさと揺れる。

見張り台の男たちは、アーロに向かつて弓を射かけたり、石を落としたたりしているが、頑丈な鱗に覆われているアーロにはほとんど通じない。

それでも、野生のアーロ相手なら威嚇くらいにはなるが、いま正門に群がっているアーロたちには何の効果もなかつた。

アーロたちはシトラの魔法によつて自我を奪われ、操られている

のだ。『魔物使い』と呼ばれるシトラの得意技だった。

「なあ、もういいんじゃないか？俺、待ってるの飽きたよ。俺が魔法で門をぶち破るから、突入して皆殺しにしちまおつぜ」

楽しそうなシトラと対照的に、不機嫌な声を出したのはシトラの後ろに控えている「コーライチだつた。ただし、その視線は正門ではなく、シトラの魅惑的な胸元へそそがれていたが。

「ああん、コーライチ！ その男らしい考え方かた、ステキよ」シトラはその声を聞くや「コーライチへとしなだれかかり、甘い声でそうこうと「コーライチの頬に遠慮なくキスの雨を降らせた。

魔女の証である紅い瞳を猫のように細めて、「コーライチの耳元へささやき声を吹きかける。

「だけど、もうちょっと待つて。新しい異世界人が出でたら、コーライチさんにおもいつきり暴れてもうかるから。ね？ オネガイ」

シトラはその柔らかい肢体を存分に「コーライチへと絡みつかせながらそういうと、とどめどばかりに「コーライチの唇へ自分の唇を押しつけた。

「わかったよ、シトラがそうこうなら」

すっかり夢見心地にされて「コーライチはうなずいた。たいそうだらしない顔になつていて、本人は気づかない。

「あの小娘を殺しちゃうと、あとあと面倒なのよねー」

シトラが小声でそうつぶやいたのも、まったく耳に入つていよいようだった。

「……にしても、ちょっと遅いわね。なにやつてんのかしら」

「コーライチの首に手を回し、耳に息を吹きかけて遊びながらシトラがつぶやいた。

「こちらに気づいた見張り番があわてた様子で降りていってから、もう少しひまほどたつていてる。街の反対側にいたとしても、十分たどり着ける時間だ。

「あ、来たわね」

見張り台にいる男たちの様子が変わり、階段を上がつてまづ金髪

の少女の姿が現れた。

続いてこの世界では珍しい衣服に身を包んだ中年の男性が現れた

のを見て、シトラが意外そうに目を丸くする。

「あら珍しい、大人が喚ばれるなんて。ほら、コ一ちゃん見て。あれが新しい異世界人みたい。……どうしたの、コ一ちゃん？」

シトラが見上げると、コ一イチは見張り台を見上げて固まっている。

やがて、その身体がこきぞみにふるえはじめた。

「ど、ど！」

「トウ？」

「父さん　？」

見張り台にあがつた智浩は、ミユールが指示したほうを見て、すぐにため息をついた。

見たこともない巨大な亀の背に乗っているふたりの人間。そのうち、少年のほうはこちらを見て固まっている。

やや距離はあるが、さすがに見間違えるはずもなかつた。

「どう？　おじさん」

「間違いない。あれは浩一　私の息子だ」

「そう……」

肩を落としている智浩に、ミユールはどういえばいいのかわからずそれだけいった。ただ、これで智浩は自分に協力してくれることになるはず。そう思い、ひつそりと安堵の息をつく。

「で、あの息子にべつたりくつついてる女は何だ」

「え？　あ、ああ。あれが三魔女のひとり、シトラよ」

シトラは浩一の首に手を回し、体重を預けたまま智浩を見上げていた。まだ幼い息子　智浩はそう思っている　に、娼婦のようにしじけない肉体をべつたりとはりついているその様子に、智浩は不快感を覚えた。

「けしからん」

「えつ？」

智浩はつぶやくと、身を乗り出した。

「浩一！　おまえはなにをやつとるんだ！」

大声でやう叫んだ。

智浩は息子のことを叱られたことはない。しかしその声は、浩一の心の芯の部分を無条件に揺さぶる効果があった。

「えつ、なーに？　コーちゃん、あのおじさんと知り合いなの？」

ひとり事情を解きないうつりが智浩と浩一を交互に見くらべている。

浩一からすれば、これまで面と向かって反抗したことのない父親である。もういくらか年若ければ、これだけで抵抗する心を完全に奪われていたかもしれない。

だが、思春期に入り、日に日に成長する心と体が、そしてなにより隣にいるシトラの存在が、浩一を勇気づけた。

「と、父さ　親父こそ、なんでこんなところにいるんだよ？」

よつやく我にかえつてそういうかえす。

すると、痛いところをつかれた智浩は、語氣を弱めてしまった。「む？　それは、おまえの部屋にあつた召喚の書を見てだな……」

「あーっ、勝手に部屋に入つたのかよ！」

案の定、智浩のひんしゅくをかつてしまつ。

「あ、いや、それは――」

「ちよつと、おじさん！　なに押されてるのよー。」

急激に勢いを失った智浩が、ミュールにたしなめられた。

「そ、そうだ。そんなことはどうでもいい。浩一、どうしてこんな街の人を苦しめるようなことをしているんだ。みなさん食糧が不足して、たいそう困つていらつしゃるんだぞ？」

父親に問いつめられて、浩一は視線をそらした。

「……」

「浩一、答えなさい」

浩一はしばらくなぞらしたまま無言でしたが、やがて圧力に耐

えかねたのか、輿の上ではじけるように立ち上がった。

「うつ、つるさいなあ、親父には関係ないだろー。」

「あん」

「なつ」

ふりほどかれる形になつたシトラが声をあげ、智浩は絶句する。
「ここは俺たちの世界とは違うんだ。ちょっと現実感のある夢、ゲームみたいなもんだよ。この世界の人間がどうなると、俺には関係ない。飽きたら帰ればいいだけさ。もっとも、せっかく魔法が使えるんだ、当分帰るつもりはないけどな。親父はさつさと帰れよ、明日も仕事だろ？」

しゃべっているうちに、父親に對して感じる無意識の恐怖心が吹き切れたのか、挑発的な笑みさえ浮かべて智浩を見返すようになる。まさか息子にそんな物言いをされるとは思つていなかつた智浩は、なにも言い返すことができないでいた。

「コーラー、……本当に、本当にそう思つているの？」

かわりに問いかけたのは、ミコールだった。かすかに眉をひそめ、悲しげな目で浩一を見つめてくる。

「ほ、本当に決まってるだる」

浩一はそう答えたが、ミコールと目を合わせようとはしない。

「それなら、ちゃんとわたしの目を見て答えて」

ミコールがそういうつても、浩一は外壁に群がつているアーロを見るふりをして、ミコールを正視しなかつた。

智浩はその様子を見て、口でああはいつても、浩一はミコールや街の住民に対して後ろめたさのようなものを感じているのだ、と思つた。

きっと、あの魔女につまうことされて、裏切らざるを得ない状況にさせられたのではないだろうか。このままミコールに任せておけば、浩一を改心させられるかもしない。

そんな智浩の思惑と、場にながれる神妙な空気をうち破つたのは、ややおいてけぼりにされていた魔女シトラだった。

「ちゅうど、コムスメ！ あたしのコーちゃんをいじめてんじゃないわよ！」

「じゅ、小娘ですって？」

その言葉に、それまで神妙にしていたコールは驚くほどあっさりと挑発に乗つてしまつた。

ミコールがいいかえすと、シトラは「こりゃとばかりにいっつのる。「コムスメでしょーが。なあに、コーちゃんをあたしにとられたくせに、まだ誘惑しようつていうの？ その短いスカートだつて、コーちゃんにいわれてそうしたくなに！」

シトラがそういう、智浩が思わずミコールの腰に手をやる。途端にミコールは赤くなつて膝上丈のスカートの裾を押さえてしまつ。「じつ、これは、確かにコーライチにこのほうがかわいいいつていわれたんだけど、じゃなくて、違うのー。このほうが動きやすいからこうしてるのであつて、別にそんなのじや」

聞かれてもいないのに、あわあわとそんな弁解をする。

「ふん、あんたみたいのがいくらがんばつたつてムダムダ。女の魅力はやっぱりここよ。ねー、コーちゃん？」

勝ち誇るシトラは、そういうながら両手で自分の乳房をこれ見よがしに持ち上げてみせる。

浩一は無言だったが、思春期の男の悲しい性が、視線はがつたりとシトラの手の中で柔らかく形を変えるそこに固定されていた。それを回答と受け取つて、シトラは満足げにほほえむ。

「うふふ。あんたみたいにちっちゃなおっぱいじや、特殊な趣味の男しか捕まえられないんじやない？」

「そ、そこまでちっぢやくないわよー。」

「あらそうなのー。」からじやせんせんふくらんでもよひに見えないのよねえ、「めんなさいー。」

「なによ、もう老眼はじまつてゐんじやないの、おばさんー。」

「なつ、一十八で老眼がはじまるわけないでしょ。」

「ふんだ、十代からみれば一十八も五十八も大差ないわよ。」

「なんですか、このガキ！」

「なによ、おばさん！」

いつの間にか、智浩と浩一はそひちのけで、みにぐこののしきあいが展開されていた。

世界を救うだの、人々を混乱させている魔女だの、スケールの大きい話をさんざん聞かされ、いまもこつして怪物が門を突破しようとしているわりに、ずいぶんと緊張感のないものだ。智浩はあつけにとられて言い争いを続けるふたりを見ていた。

まわりを見ると、男たちも弓矢や石を落とす手を休めて、「またか」といった表情で見物している。

アーロたちだけが、変わらず勤勉に門への体当たりを繰り返していた。

ふたりは次第にヒートアップの度合いを強めていくものの、罵倒する材料はだんだん乏しくなっていって、しまいには「ちんちくりん」だの「ホルスタイン」だの、勢いだけで程度は低いやりあいに成り下がつていった。

結局、見るに耐えなくなつた智浩がミコールの肩をたたいた。

「なによ？」

すっかり頭に血が上つたミコールは、智浩に対しても歯みつかんばかりだ。

「すまんが、君に任せているといつまでも話が進まない」

智浩に落ち着いた声でいわれ、ミコールはよつやく我に返つた。

「あ、うー、じめんなさいーー！」

あわてて頭を下げると、すっかり朱に染まつた頬を手で隠しながら一步下がつた。

「ふん、もう終わり？だらしのないこと

そういうシトラも、肩で息をしている。

浩一はといえど、輿に取り付けられている背もたれによりかかつて、すっかり傍観者きどりだ。

「さて、シトラくんといったな。私は早乙女智浩。君の隣にいる男

の父親だ」

「あら、おとつわまでしたの? んむひ、『一いちやんたらすべに
つてくれればいいの?』」

「……いった気がするけど」

肩をいからせ、田をむいてミコールをこちらみつけたシトロは、
智浩が挨拶したとたんしなをつくつてみせ、それから浩一の頬をつ
ついた。

「私は、彼女にこの世界の魔女を退治するように依頼された」

智浩がミコールを横目で見ながらいつと、シトロの様子がすこし
変わった。紅く輝く瞳を細めて、智浩の姿をなめるように観察する。
「だが、私はまだここへ来たばかりで、状況をしっかりと把握でき
ていない。そんななかで君を一方的に退治するのは抵抗がある。よ
かつたら、なぜ君がこんなことをしているのか、君の言い分を聞か
せてほしい」

「あら」

「ちよ、ちよっと、おじさん?」

智浩の言葉にあわてたのはミコールだ。

「どうしてそんなこと……協力してくれるんじゃないかったの?」

「もちろん、そのつもりだ」

問いただされても、智浩は平然としている。

「だが、私がここについて知っていることはほぼすべて、君から聞
いたことだけだ。そんな一方的な知識だけで相手をやつつけるなん
て危険なことはできない。双方の言い分を聞いて判断したい。その
上で、まずは多くの人を危険にさらしている街の封鎖を解除させる
こと。それから、君のついていた、あー、名前は忘れたがなんとか
王国と契約をしてもらひ。これができれば、君の要求は達成したこ
とになるだろ?」

「それはそうだけど……」

「それなら、なにも力ずくで退治なんてしなくとも、まづは話し合
いをするべきだろ。子供のケンカじゃないんだから」

智浩はまたくもつてまじめな顔でやつと放った。

「そ、それで解決できるならそもそも
「あつはははは！」

ミコールの言葉を、甲高い笑い声がさえぎった。

魔女シトラが、口に右手を当てて高笑いしたのだ。

「さすが、大人のひとは違うわねえ。ちゃんとこちらの話も聞いてくれるんだ」

笑い終わると、今度は智浩にむかって挑発的な流し目を送った。

「「コ一ちゃんのおとうさまだけあつて、ルックスは悪くないし、中年にしてはおなかもでてないわね。けつこういい線いってるかも」露骨に値踏みされて、智浩はかすかに顔をしかめた。

「そんなことはいい。とにかく君の話を」

「でも、ざあんねん。あたし、年上はシコリビじゃないの」

シトラはそういうはなつと、笑みを引っこめて智浩に攻撃的な目つきをむけた。

「なぜこんなことをしているかつて？ 楽しいからに決まってるじゃない！ あたしはね、力のないザコを踏みにじるのが好きなの。でもそれって当然の権利でしょ？ あたしには力があるんだから！」シトラが右手を振りあげると、門に群がっていたアーロたちが一斉に咆哮をあげた。門の上にいる智浩たちにまで振動が伝わってくる。何人かの男がその迫力に身をすくませた。

「あたしの能力で、凶暴な怪物だつてごらんのとおり。こいつらを使えば、無力な人間どもはどいつもこいつも尻を向けて逃げまどうのよ。こんな爽快な絵面はないわ！ こんな楽しいこと、やめられるわけないじゃないの！」

いいたいことをいつてしまつと、シトラはまた右手で合図をした。

それがあわせて、アーロたちが門への体当たりを再開する。

「ほらほら、悠長なことをいつてると、門を壊されて全員食べられ

ちやうわよー」

「だからこいつたじやない。魔女に話しかいなんて通用しないの。自分の力におぼれて、呑みこまれてしまつた連中なんだから」

「むり……」

ハコールに非難の目をむけられて、智浩はつた。

「浩一、おまえはどうなんだ。せつきこつていたことは本心なのか？」

ソーデ、丞先を自分の息子へと変更する。

「や、やうに決まつてるだろ」

浩一はそう答えたものの、先ほどにくらべるとやや歯切れが悪い。「本当にか？おまえのせいで、誰かが死んでしまうかもしれないのに？」

「う……」

浩一は口もつた。一度は振り払つた父親の圧力にふたたび捕まつてしまつ。

首筋がじつと汗ばんでくる。まだまだ父親に対して、根拠のない恐怖心を抱く年頃なのだ。

「ちよつと、一ちゃんをいじめないでよ！」

そこへ、シトラが割り込んできた。一度はなしていった身体をまたくつつけ、浩一の左肩に胸を押しつけるようとする。そのとき、浩一の表情がかすかにゆるんだのを智浩は見逃さなかつた。

「まさかおまえ、女の色香に目がくらんで」

「ち、違つ！」

否定の声が、あたりにひびいた。

強すぎる音量にはあせりの色があまりに濃くて、智浩はため息をついてしまつ。

「まあおまえも年頃だから、女性に興味を抱くのが悪い」とはいわんが

「違うつていつてるだろ！」

「違つていつてるだろ！」

決まり悪さを押し隠すと、浩一は輿の上で立ち上がり、シトラから身体をはなした。

「お、俺だつて力を得たんだ。それも、この世界の人間じゃ誰もかなわないような、すごい力だ！ 親父もそんなふうにエラそうにしてると、俺の魔法で大けがするぜ！」

浩一は大げさに腕を振つて強がつている。智浩は瞳だけ動かしてミコールを見た。

「大丈夫」

ミコールは小さくうつこつて、うなずいてみせた。

「そうか」智浩はできるだけ背筋を伸ばし、父親の威厳を損ねないようにしながら、いった。「なら、やってみせり」

「え？ やつてみせりつて……」

予想外の父の返答に、浩一は戸惑つ。

「そこまでいうなら、魔法のひとつも使ってみせろといつたんだ」「本気か？ まともにくらえば、けがどころか死んじまうかもしないんだぜ」

「この世界の人間を傷つけるのはいとわないのに、父親を攻撃するのは気が引けるのか？」

「そ、そういうわけじゃ……」

浩一はなおも強がつてみせよつとするが、明らかに腰が引けていた。

「この世界の人間がどうなつても自分の世界に帰れば浩一の視界には残らないが、父親であれば 同じ世界の人間であればそういうかないのだ。」

躊躇する浩一に、またしてもシトラが絡みついてきた。

「いいじょん、やつてやんなんよ！」

「でも、シトラ。親父が怪我したり、死んじやつたりしたらさすがにまずいよ」

不安な表情を見せる浩一に、シトラは明るい笑顔で答えた。

「平氣よ。この世界で死んだ異世界人は、元の世界に強制送還され

るだけだもの」

「え、 そつなの？」

「やうよ、だから気にせず、おもこいつきのめしてやつりやつてー！」

（なんぢやつて、嘘だけど）

屈託のない様子で浩一に笑いかけながら、魔女シトラは心の中で舌を出した。

（ていうか、異世界人同士で戦った歴史なんてほとんど残つてないから、どうなるかなんて誰も知らないんだけど。まあ、コ一ちゃんは単純だからそこまで考えないでしょ。それに、コ一ちゃんを元の世界に帰してあげるつもりもないしぃ……）

思惑通り、シトラの言葉で強気を取り戻していく浩一の横顔を眺めながら、その笑みが自然といやしさを含んだものになっていく。（あたし好みの年下で、しかも異世界人。こんないい物件、あつさり手放すわけないじやない。魔女を退治する力を秘めた異世界人と手を組めば、怖いものなし。世界最強のカッフルってわけ！）

「ようし、覚悟しろよ、クソ親父」

浩一はすっかり調子を取り戻し、智浩にむかってこれまで口にしたことのない暴言を吐いた。

「ここの俺が、あんたを元の家に送り返してやるから、感謝しろー！」

高らかにそう宣言すると、精神を集中し、呪文を唱え始めた。

「 e m - a v i a - d u . i

言葉のひとつひとつに呼応するように、浩一のまわりに光が集まり、やがて彼の周囲に三つの火球が浮かび上がった。ひとつひとつがどれもひとの顔ほどの大きさをしている。

「 p . i e r ! 」

浩一が最後の言葉を発すると、それらは同時に形を変え、細長い矢のようになった。

「行けーつー！」

気合にのにもつた号令とともに、三本の炎の矢が立て続けに門の

上の智浩めがけて飛来する！

智浩のまわりにいる男たちは、それを見て口々に悲鳴を上げながら身を伏せた。だが、智浩とミコールはなんの反応もせず、そのままの姿勢でそこに立っている。

いよいよ矢が智浩を直撃する、と思われたそのとき。

智浩の眼前に突如白い膜のような何かが出現し、矢をすべてはじいてしまった。指向性を失った炎は空中でむなしく四散する。

白い膜もそれとともに見えなくなつた。

「防御魔法！」「なつ、親父、仕込んでたのかよ！」

シトラと浩一が、そろつて驚きの声を上げる。

「戦いになる可能性があるなら、準備をしておくのは当然のことだ」智浩は平然とそういった。

シトラの言葉どおり、白い膜は魔法をはじくことができる防御用の魔法で、リーニャの食堂からここへ来るまでに智浩がミコールから方法を教わって、事前にかけておいたものだつた。相手の魔法に反応して発動するようにしてあつたのだ。

浩一と智浩の魔法を両方見ているミコールは、智浩の力なら浩一の魔法を防ぐことは十分に可能だといつ自信があつたが、智浩からすればぶつつけ本番である。

平常を装つてはいても、握りこぶしにした両手の中は汗でびっしょりなのだった。

一方、魔法を防がれた方のふたり組のうち、ひそかに冷や汗をかいているのは魔女シトラである。

（ここへくるまでに時間がかかったのは魔法を教えていたせいか。それはいいとして、あの威力！ むこうが見えないほどはつきりとした防御壁だつたわ。しかも、事前にかけておいたものなら時間とともに威力は弱まつしていくはずなのに……）

「それで挑発してやがつたのか、きたねーぞ！」

魔力はあつても知識は乏しい浩一は、父親のもつ魔力の大きさを考えがいたつていない。ただ予想外の方法で攻撃を防がれたことだ

けに憤慨していた。

(たとえばあたしが「一ちゃんに同じ魔法を教えたとして、あそこまでの威力が出せるかしら……)

浩一の魔力は過去に魔女退治をおこなつた異世界人とくらべても遜色なく、むしろ抜きんでているといえた。もちろんこの世界のなかでは反則級といつていいレベルだ。ミコールのもとで強力な魔法を覚えていけば、伝説どおりに魔女を倒す存在になり得ただろう。だからこそシトラは浩一を籠絡したのだ。もちろん、好みの問題もあつたが。

(まさかあのコムスメ、二回連続で当たりを引いたつていうの?)
しかも、今度は大当たりかもしれない。

(これは、ちょっとマズイかも)

冷たい汗がひと筋、胸の谷間をつたつて落ちた。

「へん、一回防いだくらいで調子に乗るなよ」

浩一はといえばそんなシトラの様子には全く気づかず、相変わらずの勢いの良さだった。

「俺の魔法をくらい続けて、どれだけ耐えられるか

「一ちゃん、まつて」

なおも智浩にむけて魔法を繰り出そうとするが、そこにシトラがストップをかける。

「なんだよ、シトラ」

「方針を変えるわ。一ちゃんは魔法で門を壊して、アーロを突入させながら」

(四の五のいつていられない。あいつが強力な魔法をいくつも覚える前に、確実にご退場願わなくっちゃ)

相手はこの世界に来たばかり。まだごく基本的な魔法しか扱えないはずだ。それならアーロをけしかけて、数で圧倒してしまえばなんともなる。先ほどの防御魔法はあくまで魔法をはじくだけで、物理的な障害にはならない。シトラには勝算があった。

「ええつ、どうしてや。こまから俺が

「いいから」

浩一は不満げに口をとがらせたが、シトラにいつになく強い言葉でいわれると、不承不承うなずいた。

「ちえつ、わかつたよ」

かすかに未練の残る田で智浩の方をちらりと見やつたあと、正門にむけて意識を集中する。

「em , avia , qian , annu !」

言葉とともに現れた巨大な火の玉 数はひとつきりだが、大きさは先ほどのみつつ火の玉をあわせたほどだ が一直線に正門へとむかい、アーロたちを飛び越えて門の上方に炸裂した。

「きやつ」

「おつと」

その上の見張り台はそれまでのアーロの体当たりとはくらべものにならないほど激しく揺れた。ミュールはバランスを崩して転びそうになり、智浩がとうさに腕をつかんで支えてやる。

「大丈夫か?」

「わたしは平気。でも、むこうはアーロを突入させる氣みたい。近接戦になつたらあの数はさばききれないわ」

「どうすればいい」

「とにかく、門が壊される前にアーロの数を減らすしかないわ。トモヒロの魔法で!」

浩一は一撃で門を破壊できなかつたとみるや、すぐに次の魔法を放つため集中をはじめている。さきほどより強力な火球をとばそうとしているのか、集中の時間を長くとつてているようだ。

智浩は口中にたまつたつぱを音立てて飲み込み、それから眼下のアーロを見据えた。泡立つ心を落ち着けながら、右手をゆっくりと高くあげる。

「一匹ずつねらつているのでは間に合わないわ。意識を広く持つて

！ 一度でなるべく多くの敵をとりえるの」

「呪文はそのまままでいいのか？」

「大丈夫。精霊たちが術者の意思を感じてくれるから」

「よし わかつた」

うなずいて、意識を集中しはじめる。

（たくさんの中標を一度に攻撃しようとするれば、当然威力は減衰するはずだ。それを防ぐには……）

智浩は一瞬だけ、同じように意識を集中している息子をみやつた。
それから、呪文を唱え始める。

「em , avia , du...」

「あつ」

ミュールが声を上げたのは、それがまだ智浩には教えていない魔法だったからだ。

それはつい先ほど浩一が使ってみせた、炎を矢の形にして敵へとばす魔法だった。

ただ火球を投げつけるより、この方が炎を分散しても威力が落ちないはずとにらんで、智浩がとっさにまねをしたのだ。

「p.i.e.r!」

最後の言葉とともに、炎の精霊たちが智浩の意思を具現化する。アーロにむけて落とすべく、炎の矢が下向きに出現した。

「な、なによ、それ……」

シトラの声が、驚愕のあまりふるえた。

ミコールも、見張り台の男たちも、そればかりか次の魔法のために集中していた浩一さえも、そしてなにより、智浩自身も。

目の前あまりの光景に呆然としていた。

智浩の魔法は、確かにアーロの頭上に炎の矢を出現させた。しかし尋常でないのは、その数である。

アーロの総数に匹敵するほどの、数十本の炎の矢が、智浩の魔力によって生み出されていたのだ。

しかも、矢の一本一本は先ほど浩一が放った三本の矢と同等の太さを持っている。

アーロたちが見上げれば、炎が空を覆い尽くさんばかりだつただろづ。

「し、シトラ、あれ……」

浩一がぼうとしたままつぶやく。

「あつ、た、退却！ 退却しなさい！」

その声で我に返ったシトラが大あわてでアーロに指令を下される。

「トモヒロ！」

それをみてミコールもあせつた声で智浩をつながした。智浩が指示を与えないければ、生み出された炎は落ちていかない。

「あ、ああっ」

予想をはるかに超えた状況に呆けていた智浩も自分を取り戻し、急いで右手を振りおろした。

数え切れないほどの炎の矢が、一斉に解き放たれてアーロを穿つ。

シトラの命令にしたがって後退しようとしていたアーロたちではあつたが、門前に密集しそぎていたこともあり、その行動は遅きに失した。

矢はねらいどおりアーロの群れをとらえ、怪物たちの断末魔は門の中で避難していた女たちにも届いたのだった。

「あ……あ……」

シトラは水面に浮かぶ鯉のように口をパクパクと動かしていたが、意味のある言葉を発することはできていた。

一瞬のうちに眼前に広がった光景は、彼女にとつては悪夢といつていいものだろう。

正門前は、無数の炎の矢によって大地がえぐられていた。下草が燃えているのか、ところどころで小さい火の手が見える。あちこちで白い煙が上がり、火の粉も舞っている。

そして、直前まで彼女の忠実な手足であつたアーロたちは、大多數が折り重なるようにして倒れ伏していた。

完全に息絶えているものは半数ほどだが、息があるものも大半は身動きができない状態、難を逃れたのはほんの数匹ほどだった。

彼女が手塙にかけて育てたモンスター軍団は、智浩の呪文と右手のひと振りによつてあっけなく壊滅状態にされてしまったのだった。シトラのかたわらにいる浩一も、彼女に声をかけてやる余裕はなかつた。

目を見開き、全く無言のままで、その光景を眺めている。

恐怖はなく、ただ驚きだけ。

それほどに、彼の父が放つた魔法は想像を絶していたのだった。そして、それは智浩たちの陣営にしても同じことだった。

魔法を放つた智浩自身が、誰よりも驚いていた。理不尽さを感じていたとさえいえた。

自分の言葉によつて炎が生まれ、自分の指示によつて目標へむかつて飛ぶ。それが夢物語でないことは、先ほど確かめて納得したはずだ。

アーロに包囲された街を救うことを決意したとき、あの怪物を自分の意思で殺す覚悟もしたはずだ。

だが、足りていなかつた。

その力と覚悟が、これだけのことを引き起しすのだと、そこまで意識は彼にはまつたくなかったのだ。

だから、先ほど眼前に浮かんだ無数の炎と、いま眼下に累々と並ぶアーロの死体が、本当に自分のしでかしたことなのかという思いが自然と智浩の脳裏に浮かび、そしてなかなか消え去らないのだった。

「なつ、なんのことすんのよお、このバカ！」

シトラが叫んだ。ほとんど泣き声だ。

「ここまでアーロを集めるのに、あたしがどれほど苦労したと思つて……ギャクタイよ、動物虐待！」

「な

シトラのそれは負け惜しみでしかないのだが、智浩はまともに受け取つてしまつ。ミユールがすこし心配そうに智浩を見上げたが、シトラはその様子には気づかないようで、好きにまくしたてている。「なによなによ、「一ちゃんのお父さまだからつてやつていいことと悪いことが……ん、なんか焦げ臭いわね？」

「し、シトラ！」

シトラが鼻をひくつかせると同時に、浩一がぱつと立ち上がった。
「燃えてる、燃えてるよー！」

「燃えてるつてなにが、ぎゃああああ！」

シトラが振り向くと、燃えているのはなんと自分の着ているドレスの裾だった。シトラは悲鳴を上げた。

絹製の豪奢なドレスの裾に火の粉が燃え移り、嫌なにおいを放出しながらちりちりとすこしづつ燃え広がつていたのだ。

「ぬ、脱いで、脱いで…」

「こんなところで脱げるわけないでしょ！ なんとかしてよー！」

異世界からきた強力な魔法使いと世界を混乱に陥れる魔女のふたり組は、輿の上でわめきながらばたばたと駆け回つたあと、結局最後は浩一がはいていたサンダルで裾をたたいて消し止めた。

その滑稽さに見張り台の上にいた男たちからは失笑が漏れる。

浩一はサンダルを履きなおしながら、「こいつうときつて、魔法を使う余裕なんてないよね……」としみじみいった。

シトラは台無しになつたドレスの裾をじばらく眺めていたが、最後は見張り台をきつとこちらみかえすと、心底悔しそうに地団太を踏む。

「あ、あたしに恥をかかせて、覚えてなさいよーーこの、この……」

歯ぎしりが聞こえんばかりに歯を食いしばつてしまふやうそうして、いた魔女シトラだったが、

「う、うわーん！」

結局いい捨てゼリフが思いつかなかつたのか、最後は泣きながら自分たちの乗つている亀の怪物を回れ右をせると、そこから走り去つていった。生き残つたわずかばかりのアーロたちが後を追つていく。

「意外と早いのよね、あの亀」

ミコールの言葉どおり、亀の怪物はアーロを引き離すほどのスピードで、あつとこう間に見えなくなつたのだった。

魔女シトラと浩一、そして付き従う何匹かのアーロの姿がすっかり見えなくなつてしまつと、見張り台は歓声につつまれた。
ひと月以上にわたつて続いた街の封鎖がついに解かれたのである。「いやーっ、やつたなー！」

男たちのひとりが智浩に近づくと、その背中を豪快にたたいた。それを合図にするかのように、ほかの男たちも口々に智浩をたたえながら、肩をたたき、握手を求めていく。

「すごい魔法だつたなー！」

「あなたは街の救世主だ、ありがとうよ」

この街に入つてからずつと、ミコールとコーニャをのぞいた街の住民はみな一定の警戒心を持つて智浩から距離を置いていたが、ようやくその垣根が取り払われたのだった。

智浩はまだ自分の引き起こしたことへのショックを引きずつていったのだが、男たちはそんなことはお構いなしだ。それまでと打って変わつて全員が心からの笑顔を浮かべていた。

「よしつ、女たちを呼んでくるぞ」

「おお、祝宴だな！」

「やつと腹一杯食えるなあ……」

そして男たちは満面の笑顔のまま、階段を駆け降りていった。

その場には智浩とミコールが残される。

「お疲れさま」

ミコールが右手を出し、握手を求めた。

「ああ」

智浩もそれに答えたが、やはり声にも、あわせた右手にもビリとなく霸気がない。

「すごい力、だつたね」

眼下からはまだ、白い煙が数本上がっている。ミコールは見張り台の石壁の縁に手をおき、静かにそういった。

「あれは本当に私の力だつたのか？」

「紛れもなく、あなたの力よ」

静かに、しかしはつきりとそう告げる。

「わたしが今まで見たなかでは、間違いなく一番……文献や伝説に残されているものを含めても、あなたの力はきっとトップクラスの強大なものだわ」

「大きすぎる」智浩は正直にいつ。「私には扱いきる自信がない

「おそれなくとも大丈夫」

ミコールは顔を上げ、智浩に励ますような笑顔を向けた。

「あなたの力だもの。ちゃんと制御できるようになるわ。そのためにも、わたしがこれから魔法を使うための知識をしつかり教えてあげるから」

「そうだな、だが……」

智浩は眼下を見やつた。そこには数十体の怪物がいまなお横たわ

つていて。

その傷口は炎によつて焼かれているため、出血はめだつていない。そのため、知らずに遠くから見ただけではそれが死体だとは思わないかもしない。

だがその実、彼らのほとんどすでに死に、まだ息があるものも確實に死にむかっている。

そうしむけたのは智浩であることに間違いないのだ。

「シトラのいったこと、気にしているの？」

智浩は答えなかつたが、固さを増した表情が物語つていた。

「あんなの、気にしなくていいわよ。アーロは野生でも、人や家畜、畠をおそう害獣だもの。群れが見つかつたらすぐに軍隊が退治にいくへらいなのよ」

「そうなのか

「そうよ。まあ、すぐに割り切るのは難しいかもしねいけど

「いや……確かにそうだな」

智浩は自分の右手に視線を落とした。きれいなままのその手を、ぎゅっと強く握る。

「一匹を殺す覚悟をしておいて、十四を殺す覚悟ができるでいいといつのは、おかしな話だ」

「えーと……あんまり思い詰めないでね？」

ミコールはすこし心配だつた。とはいって、これは自分で解決するほかない問題だ。自分よりずっと年上のトモヒロなら、きっとどうまく折り合ひをつけてくれるだろ？ そう考へるしかなかつた。

いつの間にか太陽は西にかたむき、空の色が赤く染まりはじめている。

「もうこんな時間が」

つい日常の感覚でやつづぶやいてから、智浩はここが異世界であることを思い出す。

だが空の茜の色は、元いた世界となんら代わりのないものだつた。

「「この世界の夕焼けは、きれい？」

隣に並んでいるミコールがそつたずねる。

「ああ」

ややあって、智浩はそう答えた。

「「コーライチも、この」で夕焼けをみたのよ」

不意に息子の名前を出されて、智浩はミコールを見た。

「きれいだつて、じつてくれたの」

ミコールは空のむこうへと視線を馳せている。智浩からすれば少女でしかない彼女が、このときばかりはやけに女の気配をさせているように感じられた。夕日の赤い光が、彼女を大人びて見せているのだろうか。

「だからね、きっと大丈夫」

ミコールが勢いをつけて身体「」と向きを変えた。改めて正面から見れば、一瞬感じた女らしさは消えて、最初と同じ快活な印象の少女がそこに立っている。

「「コーライチは、シトラに」」と言い含められて、たぶん事態をよくわかつてないまま協力しているんだと思つた。おじさんが説得すれば、きっと改心してくれるわ」

「たとえそうだとしても、多くの人に迷惑をかけ、挙げ句の果てに父親にむかって炎を投げつけてきたことには変わりない。親として、一度きつづく炎を据えてやらねば」

「ふふ」

「……笑うところか？」

「あ、「ごめんなさい。なんだか「「コーライチが」」うらやましいなつて。わたしのお父さんは、もう死んじゃつているから」

「それは」

智浩はいいかけた言葉を飲み込んだ。

ミコールはおだやかに笑つてゐる。笑つて話せるくらいには昔の出来事なのだろう。だが一方でその笑顔は、それ以上踏み込んでほしくはないという意思表示にも感じられた。

四十六年生きていても、こんなときなんといえばいいが、なかなか妙案は思いつかないものだ。

智浩が迷つていると、背中越しに金属がきしむ音が盛大に聞こえてきた。

内心ほつとしながら振り返ると、正門がゆっくりと開いていくところだった。そこから住民がわらわらと飛び出していく。

「どうしたんだ？」

「祝宴よ。さつきいつていたじやない」

不思議そうに眺める智浩に、ミコールが答える。

「あそこでやるのか？」

魔女シトラという脅威が去つたとはい、そこは街の外側だ。まして、数十体の一口の死骸が横たわっているのだ。だが、ミコールは当然、といった様子でうなずいた。

「いちいち運びこむのは面倒でしょ」

「運び込む？」

「いいから、わたしたちも行きましょ」

空はすっかり日が落ち、電灯のないリボーテの街の中は暗い。そうはいつても雲はなく、砂を蒔いたかのような星々が照らしているため一歩先も見えない漆黒というほどではないが、すでに深夜であるかのように街はひつそりと静まりかえっていた。

だが、眠っているものはひとりもない。

住民たちはみな、正門の外に集っているのだ。

そこにはいま、まさしくお祭り騒ぎとなつていた。

ついさきほど、ふたりの魔法使いによる炎がとびかついていたその場所で、いくつもの火がたかれ、そのどれもに人々が集まっている。ある場所では串に刺された肉があぶり焼きにされ、ある場所では大きな鍋がつるされて、そのなかではやはり大きな肉の塊がゆでられている。

魔女シトラによつてひと月以上にわたつて街を封鎖されていた住民たちにとつて、新鮮な肉を口にするのは本当に久しぶりだつた。もちろん、材料となつているのは。

「まさか、これを食べるとは……」

智浩が手にしている大皿には巨大なもも肉が骨付きのまま鎮座し、食欲をそそる香りを立ち上げながら食べられるのを待つていた。確かに空腹ではあるのだが、智浩はなかなかその肉に手を伸ばせないでいる。

なにしろそれはさつきまでそこへ倒れていたアーロのもも肉なのだ。

「食べなよ、おじさん。大丈夫だよ、おいしいから」

となりでミユールがそつといつている。いいながらも彼女は自分のぶんにかぶりつき、口の周りを脂でべとべとにさせながら、もぐもぐと口をせわしなく動かした。

「あー、久しぶりのお肉！ しあわせ……」

「なんの憂いもない、心からの喜びだった。」

「あなたたちの世界じゃ、こういうのは食べないのかい？」

すこし遠くから声が聞こえて田を向けると、リーニャがこちらに向かってくるところだった。

食堂の女主人といふこともあり、先ほどまでは包丁をふるつて一口をひたすらさばいていたのだが、ようやくそれが一段落したのだろう。手にはやはり、調理済みの肉が入った椀を持っている。

「食べないというか、こんな生物はそもそもいないからな」

「ふうん」

リーニャはミユールとは反対側の智浩の隣に腰を下ろした。

「まあ、いつもも普段はあまり食べないけれどね。ただこいつらのせいでも長いこと外にでられなかつただろ？ リボーテにはもともと家畜はあまりいなかつたから、肉はすぐになくなつちまつたのさ。昼間にあんたに出した豆のスープには干し肉を入れたけど、あれは秘蔵中の秘蔵だつたんだよ？」

「そりだつたのか」

ほんのすこし意地悪さを含んだリーニャの物言いに、智浩は急に申し訳ない気持ちがわきあがつてきた。

肉入りのスープは、つまりミユールとリーニャからしたら最大級の歓待だったのだろう。だが事情が飲み込んでいなかつた智浩はそこまで考えることができなかつた。そもそも、あのスープ自体半分ほどしか食べていなかつた。

「なんだか、悪いことをしたな」

智浩がわびると、リーニャはすぐに笑顔に戻つた。

「気にすることないさ。あんたのおかげで、こうしてみんなが食事にありつけたんだからね。それより、あんたもお食べよ。調味料はあいかわらず塩しかないけれど、新鮮だから臭みもなくてうまいよ！」

「ああ……」

リーニヤがさかんに一口の肉をすすめてくる。ミコールなどは本当に幸せそうに食べているのだし、意趣返しへこうことでもなくて、本心から食べてもらいたいと思っているのだろう。

智浩からすれば、一口はこの世界へ来るなりおそれられて、あやうく自分が食われそうになつた怪物だ。それを食べるというのはなんだかとても背徳的な行為であるように思われて仕方なかつた。だが、周りの住民たちはそんなことを全く気にしていない。長らく飢えていたこともあるのだろうが、食べられる物を食べるというのはこの世界ではきっと当たり前のことなのだ。

智浩はなんとかそう自分を説得して、頭の中のグロテスクな一口のイメージを脇に追いやつた。

もも肉の骨の部分をつかんで持ち上げる。何しろ自分よりも大きな一口の太ももの部分だから、チキンのもも肉などとは比べものにならない大きさである。

いざ口に運ぼうとしてふと気がつくと、リーニヤばかりではなくミコールも、さらにまわりで好き勝手に騒いでいたはずの住民たちも、いつのまにか智浩を注視していた。

ただ肉を食べるだけなのに、なんだか引くに引けないプレッシャーを感じてしまう。

智浩は覚悟を決めて、もも肉に豪快にかぶりついた。周囲からおおっ、とちいさなどよめきがあがつた。

肉をかみきり、口中で咀嚼する。しばし、無言。

やがてのぞぼとけが動き、智浩が肉を嚥下したことを示した。

肉を嘴に収めた智浩は、すこしづかり驚いたような表情を周囲に見せながら、いった。

「うまいな

それとともに周囲からは安堵にも似た、さきほどよりも大きなどよめきが生まれ、リーニヤをはじめ何人かは笑顔になつて智浩の肩をたたいた。

「鶏肉みたいだな、身も白いし

外はこんがりと焼かれているので茶色くなっているが、ひとくちかじつてのぞく部分は智浩のいとおり白色をしている。

味も鶏に似て淡泊だが、思つていたよりもずっと食べやすい味だつたことに安心した智浩は、さらにひとつ、ふたづつとかぶりついた。

その様子を見て、周囲を取り巻いていた人たちもまた元のように騒ぎ始めるのだった。

住民たちの注目から解放された智浩は、ふと空を見上げる。

この一角をのぞけばまつたくとこつこほじ光のないこのでは、星空は都会の比ではない。

智浩が幼い頃みたプラネタリウムよりもずっと多い星々がめいっぱいに瞬いていた。

無言で空をみている智浩に気づき、ミコールは食事の手を止めた。

「帰りたいって、思つてるの？」

「帰れるのならばな」

智浩にそう返されて、下を向いてしまう。

智浩はそんなミコールの肩を軽くたたいて、笑顔をむけた。

「だが、どのみちすぐには帰れんのだろう？ それなら早く用件を終わらせて、仕事を忘れてしまわないうちに帰るまでだ。浩一も一度きつくしかつたあとで、連れ戻さなければならぬしな」

「おじさん……」

「そんな顔をするな。私はやるときめたらちゃんとやるぞ。浩一のせいで、父親の私もいまいち信用されていないかもしけないが」「や、そんなことないよ」

ミコールはあわてて首を振ると、智浩に右手を差し出した。

「これからよろしく、トモヒロ」

「ああ」

星空の下、約束の握手を交わす。

「……べたべたしてゐるな」

「食事中だつたからね」

互いにアーロの肉の脂をたっぷりつけた右手を見たあと、苦笑しあつのだつた。

正門のうえに設置された見張り台には、交代制で昼夜を問わず見張り番がいることになっている。

だが、さすがにこのときばかりはすべての住民が眼下の宴に出払ひ、誰も立つていなかつた。

かがり火だけが焚かれた、無人のはずのその場所に、ひとりの少女が立つてゐる。

肩の先まで伸ばした金髪と、レースをふんだんにあしらつた黒のドレス。動かすじつをしていれば、人形なのではないかと錯覚するほどにととのつた顔立ちを持つた少女。

だが、その瞳は宝石のようにあか紅あかい。

少女は、魔女パスクミュルであつた。

「うふふ……」

彼女の存在に気づくものはいなかつた。もちろん、その視線がどこにむけられているのかも。

視線の先では、智浩が楽しげに食事をしてゐる。

その隣にはやはり楽しそうに笑うミユールがいて、ふたりを囲むようにして街の住民たちが輪をつくつてゐた。

その様子を、パスクミュルはほほえみをたたえて見つめている。智浩も、いまは少女に気づかない。

たとえ何かの拍子に見張り台に目をやつたとしても、誰も気づくことはないのだ。

「うふふふ……」

パスクミュルは目を細めて笑つた。

そして、煙が立つよにしてそこから消えてしまつた。

紅いかがやきの名残をその場に残して。

オーバーエイジ・プレイブヒーロー 第一章 おわり

第一章へつづく

(1-1) (後書き)

お読みいただきありがとうございました。

どうしてか昨日の更新分、(1-0)とするところが(1-1)になつていきました。戸惑つた方もいるかもしませんが、ただのケアレスミスです。すみません。

さて、これで第一章は終わりです。内容的には序章といつてもいいくらいかもしませんが。

しかし、構想を考えたときにすでに分かつていたことではあるのですが、これ、誰向けの小説なんだろう?

このサイトに多くいそうな学生の人たちが読んだらどう思うのだろう。智浩に感情移入……はしないよな、たぶん。

聞いてみたいけど、自分のまわりに意見を聞かせてくれる知り合いの学生はいないので、誰か教えてください。

ちなみに、書いている自分は大変楽しいです。お気に入り登録してくれくださっている方もいるので、自分と感性が近い人もきっといるに違いない、と勝手に考えてこの先も書いていこうと思います。

少し書き溜めをしようと思つてますので、続きの更新はしばらく時間をいただくことになると思います。

「意見」「感想などあつましたら、ぜひお聞かせください」。

(一)

智浩がこの世界へときて一日が過ぎ、二日目の朝をむかえた。

「くあつ……」

伸びをしながらベッドから抜け出す。暗い足下に注意しながら窓際まで行き、窓を覆っている木の板を上げる。朝の太陽の光がさしこみ、室内が一気に明るくなつた。

同時にさわやかな風も入つてくるが、少々ひんやりとしている。智浩は身体をぶるりとふるわせると着替えをはじめた。

寝間着としてきていた服も、これから着る服も、智浩がこの世界にきたときに身につけていた衣服ではない。それだと田立て仕方がないので、住民から服をゆずり受けたのだった。街の救世主となつた智浩に衣服を提供したいという申し出は数多く、しかしそんなにたくさんもらつても仕方がないので受け取つたのはひと揃いだけである。しかし、彼ら住民のもちものとしてはかなり上等な服を提供されたのだということは智浩にも理解できた。

なめらかな毛織りの肌着の上に、こぢらはややごわごわとした手触りだが、頑丈で動きやすいつくりのズボンをはいて、腰ひもを締める。そして胸元がV字に開いたシャツを着るのだが、これは胴回りがかなりゆつたりしたもので、その上からベルトでまた締める。丈も太ももにかかるあたりまであるため、ワンピースのスカートをはいているようだ、智浩はすこし落ち着かない気持ちになる。

さらにじつかりと編み込まれたサンダルをはけば、着替えは完了だ。

身体を回しながらおかしなところはないか確認する。鏡がないので、限界はあるのだが。

(なにしろ昨日はずいぶんと恥をかかされたからな)
智浩がこの服を最初に着たときの失態を思いだしていると、入り口のドアがノックされた。

「おじれん、起きてる?」「ミコールの声だった。

「ああ」

智浩が返事をするとき少しだけドアが開き、足が差しこまれた。両手にものを持ったミコールが、足と肩でドアを開けながら中に入つてくる。

「行儀が悪いな」

智浩が苦言を呈すると、ミコールはふくれた。

「手がふさがってるんだもん、しょうがないじゃない」

「入る前にそういうえば、私が開ける」

「……なるほど」

ミコールが持つてきたのは水の入った桶だった。

「はい、顔を洗ってね」

智浩はミコールに礼を言つてから、両手を水の中に差し入れる。風も冷たいが、水も冷たい。ここリボーテはそこそこ標高が高いらしく、朝晩は冷えこむのだ。

「歯は磨く?」

「……ああ」

次にミコールが渡してくれたのは、少量の塩が入った包みと木の枝だった。

「まあ、しないよりはましだろう」

智浩は木の枝を桶の水で洗うと、塩をつけ、口に差し込んだ。

この世界には智浩が普段使つていたような、毛先の形状にこだわった歯ブラシは当然ないし、歯磨き粉なんてものもない。さきっぽの纖維がぼぐれていいくらかブラシっぽくなつた木の枝と塩で歯を磨くのだ。

昨日はじめて渡されたときはバカにされているのかと思ったが、ミコールもリーニヤも、実際これで歯を磨いていた。ほかの手段としては指に塙をつけてこするか、なにもしないかだ。

奥歯までまんべんなく木の枝でこすり、口をゆすぐ。すつきりと

もさつぱりともしないが、無い物ねだりをしても仕方がない。

本当ならひげも剃りたいのだが、もちろん安全カミソリもショービングクリームもここにはない。昨日、念のために町の住民はどうしているのかとたずねたら、ある程度のばしてからはさみで整えるか、剃りたいひとはとなりの街までいつて理髪師に頼むのだという。もちろん、簡単に行き帰りができる距離ではないので、何かの用事のついでということになるが。

「この街には理髪師がいないのよ。どうしてもつていうならわたし
がやつてあげようか？ 自信ないけど」

ミコールの申し出は丁重に断つた。会社人としては毎日剃りたい
がこれも仕方がないだろう。

「それにしても、ずいぶんかいがいしく面倒を見てくれるが、君は
こここの従業員というわけじゃないのだろう？」

智浩が昨日今日と夜を明かしたこの部屋は、リーーヤの食堂の一
階だった。もともと宿屋も兼業しているのだといつ。

じつはミコールもこの宿の別の部屋に泊まっているのだ。彼女は
もともとこの街の出身だが、すでに家族はおらず、召喚師になる修
行のために街をでた際に家を引き払ってしまったため、もつこの街
に彼女の家はないのだといつ。

「もちろん違うわよ。私だって一応お客様なんだから。とはいっ
ても、おかみさんは私がちいさい頃からよく知つてゐるひとだから、
あんまりそんな感じでもないけど……おじさんの面倒を見るのは、
そういう決まりがあるからなの」

「決まり？」

「異世界人を召喚したら、その面倒は原則として召喚師が自分でみ
るの。無事に元の世界に返してあげられるまでね。ほとんど無理矢
理呼びつけて協力してもらう以上、できるかぎり不自由を感じさせ
ることがないようにつて、契約書に必ず書かれる条項なのよ」

「契約書、ねえ」

そんなところだけ、みょうに会社的である。

「さあ、下に行きましょ。おかみさんが朝食を用意してくれているから。詳しい話もそこでするわ」

水桶などをまた両手に抱えてミコールが立ち上がった。そのままドアへむかおうとするが、ふと気がついて智宏をふりかえる。

「今日は服、ちゃんと着られたみたいね」

「おかげさまでな。なにしろ昨日は

「おひげさまだ。なにしろ昨日は

いいかけて、智浩は口をつぐんだ。

昨日試しに着たときは腰帯が上すぎるといわれたのだ。ミコールが苦笑いしながら締めなおしてあげるといい、腰帯をほどいたとき、その下のズボンがすとんと落ちてしまった。ひもの締め方がゆるかつたのだ。

腰帯を締め直そうとしていたミコールの顔はひょいと智浩の股の高さにあつた。

もちろん下着をつけていたから現物をみられたわけではないが、ミコールは赤面して顔を逸らしてしまい、周囲にいたリーニヤや住民たちは大笑い。とんだ赤っ恥だった。

ふたりとも思わずその光景を頭に浮かべてしまい、そのときのよう赤面した。

「と、とにかくいましょ」

「あ、ああ」

なんとも微妙な空気のまま、ふたりは部屋をあとにした。

「正式な契約を交わすために、街をでる?」

「そう。ここには契約書を作成できるひとはいないから

一階の食堂で食事をしながら、ミコールは智浩に今後の予定を語つた。

ちなみに、食事ははじめて智浩がここを訪れたときに出されたのとおなじ、塩味のみの豆スープだった。干し肉も入っていない。一口の肉はかなりの量があったはずだが、あの祝宴でほとんど食べ尽くされ、残った分も昨日一日ですべて住民たちの胃袋に消えてい

た。

封鎖が解除されたとはいへ、近くの街まではただ行くだけでも一日がかり。枯渴していた物資が届くにはすぐなくともあと一日は必要だった。それまでは我慢を続けなければならぬ。

とはいえそれもあと少しのことだ。終わりが見えていれば、我慢もとして苦にはならない。住民たちにもう陰鬱な空気は流れていなかつた。

さて、ミコールの説明によると、現段階では智浩がミコールに協力して魔女を退治するという約束はいわば仮契約の段階で、正式な契約を交わすためにはある場所へ行かなければならぬこといつ。

その場所とは、ここよりもさらに北の山奥にあるところミコールの師匠が暮らす屋敷のことだつた。

「正式な契約を交わしたら、ペルメリカ王国の首都であるグルエンの街へ行つて、そこで魔女の情報を集めようと思うの」

「シトラはいいのか？　あいつの根城はこのあたりなんだらう？」
「一口をやられて、しばらくはおとなしくしてゐると思うわ。それよりも、ほかの魔女たちはこまどりにて、なにをしてゐるのか。この街に閉じこめられている間、そつした情報はほととぎすには入らなかつたから」

そこまでいつて、ミコールはふと心配そうに智浩をみた。

「やつぱり、コーライチが気になる？」

シトラを放置するということは、そのせばこてる浩一のことも後回しにするところになる。

「いや……」「すこし考えてから、智浩はいつた。「たしかに、ほかの魔女ことは私はなにも知らないし、そのほうがいいのだろうな。どうも浩一は尻に敷かれているように見えたし、魔女のほうがおとなしくしている間はあこつも同じだらう」

「あはは……」

ミコールもふたりの関係を思い返して苦笑した。

「それで、その師匠の屋敷とこつのまどりやつて行くんだ？　わ

きの話しづらだと、けつこじう距離があるようだが

「歩いても行けなくはないけど、何日もかかつてしまつから、馬を

使つわ」

「馬、か……」

智浩はげんなりとした。この世界に来て、馬にはいい思い出がない。

「大丈夫よ。ゲイロンのほかにも、馬はいるから」

ミコールも智浩の表情の意味をすぐに察知したようだつた。

「街のひとたちが旅支度を整えてくれているから、もうすこししたら厩舎へ行きましょ。おじさんの相棒を紹介してあげる」

食事を終えたふたりが食堂の裏手にある厩舎へ向かうと、数人の男たちが出迎えた。おどとい、ミコールへ魔女シトラの襲撃を告げにきた若者アレクのほか、あのとき見張り台の上で顔を合わせた覚えのある男もいる。

「やあ勇者さま、お待ちしてましたよ！」

男のひとりがにこやかにそう挨拶してきたので、智浩は困つてしまつ。

「あの、昨日もいったのだが……その呼び方は恥ずかしいのでやめてもらえないだろ？」「

「へえ？」

智浩が街に来たときは露骨に警戒していた住民たちは、シトラを撃退したあと態度を一変させた。それは仕方のないことだと智浩も思う。

しかし、祝宴明けの昨日から住民のほとんどが智浩のことを「勇者様」と呼ぶよくなってしまったのだ。

どうやら、異世界から来て魔女退治をするものは伝統的にそう呼ばれているらしいのだが、智浩からすれば恥ずかしいことこの上なかつた。

そこで昨日から何度も普通に呼んでくれといつていのだが、聞

き入れられた試しはなかつた。

「そろはおつしゃいましてもねえ。じゃあ、救世主様、にします?

英雄様、とか。でもやつぱり勇者様つてのがいちばん響きがいいんじやないかと思いますがねえ」

「そつこいことではないのだが……」

結局、ここでも智浩の主張は受け入れられることはなかつた。

「セラソさん、馬の支度はできますか?」

「おつと、そうだつた」

ミコールにうながされて、セラソと呼ばれた男はぽんと手を打ち、奥へと引っ込んでいつてしまつた。

「ひょりとして、私はこれから行く先々であんな風に呼ばれるのか?」

「場合によつてはね。実際ここでは大活躍したんだし、悪い気分じやないでしょ?」

「うーん……」

たしかに気分を害されるわけではないが、圧倒的に恥ずかしさのほうが勝つてゐるようを感じられた。

やがて、セラソが戻つてきた。その後ろから一頭の馬がゆつくりついてくる。智浩はこれまで馬の顔を覚えようととしたことはなかつたが、大きいほうの馬がゲイロンであることは雰囲氣でわかつた。

「よう、大活躍だつたらしいじゃねえか」

ゲイロンは智浩の前まで来ると、おもしろくもなさそうにそういうふた。智浩はそれには答えず、ミコールのほうを見た。

「こいつのほかにも馬はいる、といつていなかつたか?」

「ゲイロンにはわたしが乗るの。なんだかんだで、一番乗りなれるからね」

ミコールがいうと、ゲイロンがぶひひんといなないた。

「ミコールう、俺だつておまえがいちばんだぜえ。でもどつせなら背中じやなくつて腹のほつに乗つてほしいのにさあ」

「だまつて。おじさんが乗るのはこの門。身体がちいさいし、

「ゲイロンみたいに乱暴に走つたりしないから安心よ」

「ゲイロンの下ネタをぴしゃりとわざわざミコールに手招きされ
て、もう一頭の馬がことこと前にでてきた。ミコールのいうとおり
馬にしてはずいぶん身体がちいさく、耳が大きいのでロバのよう
にも見える。」

「名前はポルカよ。ポルカ、この人がトモヒロ。これからしばらくな
一緒にだからね」

「ポルカは、その目立つ耳をぱたぱたさせながら、つぶらな黒い瞳
で智浩を見た。それから目を伏せて、人がおじぎをするようにおも
むろに頭を下げた。

「よろしくお願いします、勇者さま」

「あ、ああ……」

「ゲイロンを見ているので、ポルカがしゃべったことについてはも
う驚くことではなかつたが、ゲイロンとは違つて礼儀正しい仕草に
智浩は少々面食らつた。

「ポルカは、ゲイロンのお嫁さんなのよ」

「えっ！」

ミコールがそういつたので、智浩は今度こそ声を上げて驚く。

「へん、馬なんか嫁にしたつてうれしくねえや。おっさん、ほし
ならあんたにやるよ」

「あんなことをいつてこるが」

「こまは発情期じゃないからね。発情期がくれば、ちゃんと手づく
りするのよ」

「そ、そなのか」

「俺がほんとに子づくりしたいのはミコールなのによ。春がくる
となんかこう普段と違う感情が沸き上がりてきて、雌馬なんぞにム
ラムラしちまうんだよ。ああ、種族の壁がうらめしいぜ。本当なら
俺のこのたぐましい××でミコールのちいさな

「ゲイロン」

すっかり暴走をはじめたゲイロンを止めたのは、ポルカの静かな

ひとことだつた。

「な、なんだよ」

ポルカはそれ以上何もいわず、ゲイロンを見つめているだけ。だが、結局ゲイロンは圧力に負けたようにそっぽをむいてしまつた。

「あんなこといつても、ゲイロンはポルカに頭が上がらないのよ」ミューールが智浩にそつと耳打ちする。

結局ゲイロンは、ポルカが最後まで何もいわずに目をはなすまでそうしていた。

やはり、どの種族でも女が強いのは変わらないのである。

(一) (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

さて、一章ですが、この章では魔女はあまり（と云ふか、ほとどき）出てきません。智浩とミコールのやり取りがメインです。もともと独立した章と云ふよりは、幕間的な位置づけにしようかと思つていたのですが……。例によつて長くなつてしまつたので……。

馬の話とか、書かなきゃいいんですけどね。でも書かずにはられないのです。

飽きられなこつこにお話を動かさなくては。

「」意見、「」感想ありましたらぜひお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7088x/>

オーバーエイジ・ブレイブヒーロー

2011年12月1日20時57分発行